記　事

大学昇格への道

医学生命倫理学／医史学　八木聖弥

1 はじめに

京都に西洋医学を導入しようと考えた明石博高は、府大参事槇村正直らの支援を得て病院開設に取り掛かった。1871（明治4）年10月、府は布令書「療病院建営の告諭」を出して広く府民の病難を救うため療病院を設け、官民協力して事業の成就を呼び掛けた。禅林寺（永観堂）前住職東山天華をはじめとする各寺院、花街、そして一般府民は寄附を申し出た。療病院の名称は寺院側の要望によるもので、聖徳太子の四箇院にちなむ。この名称は1924（大正13）年まで引き継がれた。翌年9月、ヨンケル（Junker von Langegg）が京都に到着、木屋町二条下ルの宿舎で早速診療が始まった。11月1日には粟田口青蓮院宸殿を仮療病院とし、さらに1880（明治13）年7月には上京区梶井町に京都療病院として本格的な診療が行われる。

療病院では医学生への教育もなされた。解剖学を中心とする基礎医学や実地の臨床教育であったが、必ずしも体系的な内容ではなかった。1879（同12）年9月、梶井町に医学予科校および医学校が設置され、組織的な教育体制が整った。予科校ではドイツ語・ラテン語・数学・化学などの科目があり、医学校では物理学・解剖学・生理学・病理通論・臨床講義などの科目があった。

1881（同14）年7月、医学校は療病院から独立して京都府医学校と改称する。翌年、3名以上の医学士の教諭がいる府県立医学校の卒業生は無試験で医術開業免状が下付されることになり、猪子止戈之助らが招かれて甲種医学校に認定された。1901（同34）年9月には京都府立医学校となり、1903（同36）年6月には京都府立医学専門学校に改称される。この間、たえず一層の充実が図られてきたことはいうまでもない。もっとも、財政上の問題や京都帝国大学医科大学開設に伴う人事などによって存続が危ぶまれることもあった。しかし、関係者の努力と府民の支援によって荒波を乗り越えてきたのである。

大正期になって政府の方針に呼応する形で大学に昇格する運びとなる。本学の歴史にとって、もっとも大きな画期の一つであるといって差し支えない。昇格に関しては『京都府立医科大学八十年史』（1955年）や『京都府立医科大学百年史』（1974年）に多少記述がある。最近では吉川卓治氏がくわしい分析を行った[1]。昇格100周年を機にこれらを踏まえて昇格前後の事情について、新たな資料も視野に入れながら紹介したい。

2 「大学令」公布と昇格運動

1918（大正７）年７月、立憲政友会総裁原敬の内閣が成立した。平民宰相として国民に歓迎された原内閣は、四大政綱に基づく政策を推進した。教育施設の改善充実、交通機関の整備、産業の振興と通商貿易の開導、国防の充実である。なかでも教育施設の改善充実に関しては、高等教育機関拡張計画として発表された。大正８年度から６か年の継続事業で29校の官立高等教育機関を新設し、既設の高等教育機関も学部増設や定員増を行う計画であった。これにより大幅に収容力が増える。高等教育機関を増設問題は、明治30年代にさかのぼる。いうまでもなく、進学希望者が増えたのに加えて、各地方の利益誘導という背景があった[2]。

一方で前年に設けられた臨時教育会議は同年６月22日、大学教育および専門教育の改善に関して政府に答申をしている。答申では大学の分科は文科・理科・法科・医科・工科・農科・商科等とし、大学は総合制を原則とするが、単科制とすることもできるとした。従来の帝国大学がすべて総合制であったのに対し、一部単科大学を認めようとしたことは大きな改変であった。また、従来は官立に限られていた大学の設置者に関して、財団法人も認めるだけでなく、特別の場合には公共団体の設立も可能であると述べた。答申は全部で20項目に及び、これらを基本として同年12月6日、「大学令」（勅令第388号）が公布された[3]。

第１条で「大学ハ国家ニ須要ナル学術ノ理論及応用ヲ教授シ並其ノ蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ兼テ人格ノ陶冶及国家思想ノ涵養ニ留意スヘキモノトス」と規定した。第２条では大学には数個の学部を置くことを常例とするとし、設置学部として法学・医学・工学・文学・理学・農学・経済学および商学の８学部を挙げた。ただし、特別の必要のある場合には一個の学部を置くことができるとして、単科大学も認めたのであった。第５条で公立大学も設置可能とした。ここに公立単科大学設立への道が開かれた。

当時の医師養成は、各種学校・専門学校・大学の３層で行われていた[4]。各種学校は医術開業試験の準備を目的とする私立学校である。専門学校には官立・公立・私立があり、私立には無試験特典が与えられていなかった。公立には京都・大阪・愛知の３校があった。大学は帝国大学医科大学で、東京・京都・東北・九州の4校があった。これらを統一して大学卒業と同等の課程を修めた者に医師免状を与えるべきとの考

えが医育統一論である。医育統一論は文部省や帝国大学教授も主張するところであるが、中心的な人物は大阪府立高等医学校（専門学校令準拠）の佐多愛彦であった。佐多はヨーロッパ留学の体験をもとに「医は尊卑の差別なき人命を司る者なれば、其素養に於て懸隔あるを許さず」との信念を持った[5]。文部省との交渉の末、「大学令」以前の1915（同４）年、例外的に府立大阪医科大学を名乗ることが認められた。早稲田や慶應のように、私立では大学と称することが一部認められていたのによる。「大学令」公布後の1919（同8）年11月、改めて大阪医科大学と称した。次いで1920（同９）年、愛知県立医学専門学校が県立愛知医科大学に昇格した。大阪・愛知は、いずれものち官立に移管された。京都のみすでに帝大があったゆえに、府立として存続したといえよう。

京都の本学においても、前後して大学昇格を目指して運動が繰り広げられた。運動は学生の方から起こった。各学年から5名ずつ、計20名の委員を選び騒ぎ出した[6]。このままでは母校が廃校になるかもしれないとの危惧からであった。1919年1月11日午後1時半、小川瑳五郎校長は大講堂（第五教室）に職員・学生数百名を集めて所信表明を行った。小川校長は研究を充実させるためには大学昇格が必要である。しかし、ただ騒ぎ立てるなどの軽挙妄動は慎むべきである、と述べた。角田隆教授も一歩ずつ確実に進めていくべきであると諭した。そして、小川・角田、さらに吉川順治教授の3名はただちに京都駅に向かい、午後8時20分発の汽車に乗り、東京は文部省を目指して出発した[7]。

小川校長らは文部省で文部大臣中橋徳五郎、文部次官南弘、専門学務局長松浦鎮次郎と面会し、次の3点について質問した。

①京都に二つの医科大学が存在してもよいか。

②公立医専の昇格はどのような方法によればよいか。

③文部省としては公立医専を将来どのように取り扱うつもりか。

文部省は、官立の医科大学が二つになるのはよくないが、府立医科大学を設けるのは高等教育機関拡張の趣旨から大賛成である。公立医専はそのまま存続することも可能であり、医育統一と官立医専の昇格とは無関係であると回答した。好感触を得たといえよう。医専のままでも存続は可能とはいいながら、他が大学に昇格するならば教授・学生とも質の低下は免れず、昇格に向けて努力すべきであるというのが小川校長の考えであった[8]。

一方府知事馬淵鋭太郎は、大学に昇格させるにしても文部省が経費を引き受けるはずがないとしたうえで、財政の心配をした。設備費に100万円、維持費に1年あたり15～20万円と見積もった。大学となれば特別会計も組めず、あるいは財団法人を設立することも視野に入れなければならないと考えていた[9]。

1月14日に開催された憲政会京都支部評議員会では、「従来の中央と社会に対する貢献とに鑑み医学専門学校の昇格を期す」との一項を決議案中に加え可決した。そして、同窓会組織である校友会に奮起を促すべきであると考え、まずは医専在職者70名に市内開業医300名が協議し、全国に檄を飛ばすことを提案した。もとよりこれは資金集めのためであり、少なくとも同窓会で100万円は必要であるとした[10]。3月4日、知事は府会議員懇談会で府としても昇格実現に向けてできるだけ力を注ぎたいと述べた[11]。3月12日、教授会連名で知事に建議書を提出[12]、さらに同月13日付で校友会代表でもある小川校長は、内外の校友・学生有志と共に全国の校友に向けて檄を発送した[13]。また、同月25日には府政記者招待会を催して協力を依頼した[14]。以後、とりわけ『京都日出新聞』は積極的に記事を掲載して世論形成に一役買った[15]。

4月2日午後3時、三条柳馬場東南角の基督教青年会館で全国校友大会が開かれた。約300名が集まった。常岡良三教授の開会の辞のあと、小川校長は挨拶に立ち昇格の趣旨について述べた。角田の大会趣旨説明に続いて、新潟医専校長池田廉一郎が座長となって演説会が行われた。校外校友として野坂賢之丞（山陰鴨契）、吉益雄太郎（岐阜）、山本小太郎（滋賀）、足立慶三郎（両丹）、田村矯郎（広島）、喜多幅武三郎（和歌山）、堀沢治吉（関東）、星野湖一郎（洛外）、坂部秀夫（京都）が席に立った。校内有志として角田、梅原信正教授のほか、学生代表として勝義孝（４年生）、浅田操（３年生）、木津一葉（２年生）、泉正忠（友男、１年生）が熱弁をふるった。さらに第１回卒業生の高田畊安が座長となり、医専の歴史を振り返りその内容は大学と比べて遜色がないことを語って聴衆を感動させる。そして、革島彦一が宣言および決議案を朗読して、これを可決。三浦操一郎教授が閉会の辞を述べて散会した。

宣言書

一、医学ノ進歩発展ハ国家ノ興隆ニ関スルコト至大ナリ。実ニ医育統一ハ天下ノ声ニシテ、時勢ノ要求タリ。

二、這般発布セラレタル新大学令ハ、単科大学ヲ承認シタリ。之レ医育統一ノ前提ニシテ、吾人ノ蹶起ヲ促ス警鐘タリ。

三、吾人ハ我校ノ光輝アル歴史ト偉大ナル功績ヲ尊重シ、之ヲ府立医科大学ニ昇格セシムル事ハ、我等ノ為スベキ当然ノ義務タルト同時ニ、又邦家ニ竭ス権威アル事業ナリト信ズ。

決議

一、母校昇格ノ目的ヲ貫徹スル為ニ陞格期成同盟会ヲ組織スルコト。

二、全校友ヨリ資金ヲ醵出シ、之ヲ母校陞格ノ為ニ基本金トシテ提供シ、以テ其発展ヲ助成スルニ力ムルコト。

三、宣言ノ主旨ニ依リ目的ヲ貫徹スル為メ極力奔走努力スルコト[16]。

ここに校友会が中心となって陞格期成同盟会を結成し、募金活動を行うことが決定した。さらに200名は河原町通四条上ルの共楽館で懇親会を開いた。

5月5日、小川校長らは府庁に出向き、議長室で府会議員32名に対して昇格の必要性を訴え、大方の賛成を得た[17]。同月25日には午後4時から医専事務所楼上会議室で陞格期成同盟会第1回実行委員会を開いた。実行委員は以下の校友である（下線は理事）。

中 央 部：石田嘉四郎、一井碩、端野令三、林栄三郎、徳尾野太郎、小笠原孟敬、大原四郎、岡部理吉、革島彦一、賀川玄吾、田中秀三、竹内正之助、松井幸次郎、小橋隆次、福井剛之助、武藤友太郎、浅山協太郎、神服杢之助、西村千吉、大石粂次郎、若山昇三、横田亮雄、竹岡友信、中田彦三郎、田中繁三、中辻丹治、村上宏、浅木直之助、坂部秀夫、三好益太、高木克敬、中村正勁、佐々木恒一、中村良淳、伏原寅男、沢田亀太郎、岸田栄三郎（以上37名）

山城の部：土屋栄吉、武田信三、永井利義、星野湖一郎、大谷範治、黒沢繁弥、本田邦太郎、福井逸起、吉川秀藤、谷村久吉、島龍雄、六人部是慶（以上12名）

そして、中央部の理事長に小笠原、山城の部の理事長に星野を選び、陞格期成同盟会規則を可決した。

第一条　本会を京都医学専門学校陞格期成同盟会と称す

第二条　本会は大正八年四月二日開会の全国校友大会の決議に基き其宣言の趣旨を遂行するを以て目的とす

第三条　本会々員は全校友を以て組織し本校卒業者は入会の義務あるものとす

第四条　本会の事業を遂行する為に左の役員を設く

一、中央部実行委員　若干名

但し京都市及び山城国南部に於ける本会員中より推薦す

二、地方部実行委員　若干名

但し各府県に於ける本会員中より推薦す

三、校内実行委員　若干名

但し母校在職本会員中より推薦す

右委員の推認は全国校友大会の決議（該大会開催発起者に一任すすること）に従ふ

第五条　前条各部実行委員の任務は互に気脈相通して一致協力以て目的遂行の為に努力することは勿論なりと雖も其分掌する所は左の如し

一、中央部実行委員並に地方部実行委員は各所部地方に於ける本会の事業に関与す

二、校内実行委員は本会庶務会計を統理し且其整理に任ず

第六条　各部実行委員の分掌に関する規定は各部毎に之を定む

第七条　本会の重要事件に関し各部実行委員よりの請求ある時は委員総会を開催することを得

第八条　前条の実行委員会総会は全委員の過半数の出席あるにあらざれば開会することを得ず

但し時宜に依り委任状を以て出席者と見做すことを得

第九条　校友醵金に関する規定は別に之を定む

附則

本規定の変更を要する総会には委員総会の決議に依らざれば変更し得ず

さらに校友醵金規定を可決し、1口100円以上（3年分割、一時払いは90円）などとした[18]。同月27日には教授会として馬淵知事に面会を求めた。知事は昇格には賛成としながらも、府の財政難から学校側で資金確保の道を探れば府立として考慮すると回答した。そこで校友だけでなく、富豪からの寄附も仰ぐことになった[19]。

なお、中央部委員長となった小笠原は、孟政の三男で1897（明治30）年京都府医学校卒業、療病院勤務などを経て御幸町通押小路下ル亀屋町に産婦人科を開業した。一方で1917（大正6）年5月、市会議員に当選、1921（同10）年5月までつとめた。

さらに昇格運動さなかの1919年9月には府会議員ともなり（政友会）、昇格問題の中心的人物として活躍した[20]。

3 昇格準備と認可

昇格への準備は着々と進められた。陞格制度調査委員として角田・吉川・常岡・梅原教授と中道幹事が選ばれ、昇格に必要な設備などを調べた。学制改革調査委員として三浦・越智真逸・梅田信義・中川清・革島廉三郎教授を選び、あらかじめ時勢に適応した制度を考究させた[21]。試験制度の見直しもその一つで、従来年１回の試験があり、１科目でも不合格であれば留年であった。これを改め、学生は４年間のなかでいつでも受験でき、複数回にするという案であった[22]。

病室の拡張工事も計画された。前年12月に起工された二等病舎31室がこの年5月に竣工した。入院料は甲室が2円80銭、乙室が2円40銭であった[23]。また、院内の看護婦宿舎を河原町広小路西南角に移転し、跡地に39の病室を新築するという[24]。医専昇格後、明治末年から６か年の継続事業で大改築を行い、1914（同３）年11月に記念式典を催したばかりであった。しかし、大学となればさらに施設を充実させる必要があったのである。拡張工事はまだまだ続く[25]。

年末になると府会で昇格問題が本格的に議論された。1919年12月9日の府会では、第15号議案「大正九年度医学専門学校及附属療病院職員留学資金歳入歳出予算」、第16号議案「大正九年度医学専門学校及附属療病院歳入歳出予算」、第17号議案「自大正八年度至大正十年度医学専門学校及附属療病院継続年期及支出方法」、第18号議案「大正八年度医学専門学校及附属療病院歳入歳出追加予算」、第19号議案「京都府公債規則」の一読会が一括して行われた。横山惟二理事官（学務課長）は第17号議案に関して療病院建築費として29万8789円を計上、内容は上記看護婦寄宿舎の移転、病室（特等２，一等３、二等32、三等20）の新築、事務室の新築、耳鼻咽喉科診察室の移転、伝染病室・観察室と十二号病舎との交換などと説明した。また、第19号議案では26万9000円を起債するとしている。

翌日、上記５議案が継続審議された。さらに昇格に関する意見書が上程され、小川校長はじめ卒業生、在校生が大挙して傍聴した。

京都府立医学専門学校陞格に関する意見書

京都府立医学専門学校は我邦医専の淵源とも謂ふべく、啻に本府のみならず我邦の医事衛生に致したる功績実に顕著なるものあり。今や各官立専門学校は漸を逐ふて医科大学に陞格し、時勢の進運に伴ひ医育の統一を図らんとす。此時

に方り同校も其存立上斉しく之を陞格せしめて時代の趨勢に策応することは、目下の急務に属す。希くは閣下幸に機宜を失せず、之れが陞格に努められんことを望む。

右府県制第四十四条に依り意見呈出候也

大正八年十二月　　京都府会議長　竹上藤次郎

京都府知事馬淵鋭太郎殿

提出者　高橋豊三郎、岸田栄三郎、北山乾三、小笠原孟敬、賛成者各議員

高橋は横山に準備の進捗状況を質問した。横山は上記改築計画について説明した。小笠原から意見書についての長演説があり、1）公立医専も医育統一のために昇格しなければ廃校となる、2）廃校となれば府民の期待を裏切ることになると訴えた。田中祐四郎から1）昇格のためには設備の充実が必要、2）どれほどの府民の覚悟が必要か調査委員を設けるべきとの意見が出た。同月23日、調査委員を代表して高橋が登壇、第16号議案を一部修正して可決すべきとの意見を述べた。これによって全議案および意見書が可決され、府会として大学昇格を知事に建議することにした[26]。

1920年9月には小川校長をはじめ医師や政治家など76名を発起人として「京都府立医科大学設置賛成趣意書」を作成した。篤志家に寄附を呼び掛ける内容で、創立以来の歴史を語ったあと昇格の必要性を説き「是レニ所要ノ資金ハ総計壱百七拾万八千九百六拾参円七拾五銭ノ予算ニシテ、就中壱百万円ハ府公債ニ依テ支弁スレドモ、自余七拾万円余ハ篤志家の義捐ヲ仰ガザルヲ得ズト云フ。其他右壱百万円ノ府公債ノ償却方法ハ同校病院拾ヶ年間ノ収入ヲ以テスルノ予定ナルガ如シ。故ニ吾儕ハ右陞格ノ目的ヲ貫徹セシムル為ニ援助ノ必要ヲ認メ、本報告書ヲ貴下ニ呈シ貴下ノ愛郷心、義侠心及博愛心ニ訴フ、冀クハ応分ノ賛助ヲ与ヘラレン事ヲ。」と記した[27]。

11月には卒業生2000名以上のうち1700名から寄附が集まり17万円に達した。また、予科および精神病舎の敷地として伏見もしくは山科に5000坪を予定し、上記寄附金を充当する計画を立てた[28]。同月8日、小川校長は準備万端整ったとして京都駅午後8時50分発の列車で上京、文部省と打ち合わせを行った[29]。12月11日、馬淵知事は府会に第22号議案「自大正十年度至十二年度医学専門学校及附属療病院建築費継続年期及支出方法」を提出した。3か年で69万2655円にのぼるもので、詳細は以下のとおりである。

【大正10年度】

学校本館（二階建）	88坪5合	2万9205円
同（平家建）	67坪	1万3400円
教室（二階建）	174坪5合	4万6242円50銭
階段教室（平家建）	88坪	2万2000円
生徒控所其他（同）	70坪	1万1550円
倉庫及便所（同）	93坪7合5勺	1万5000円
病院本館（二階建）	70坪5合	2万3265円
一、二等病室及鎮静室（平家建）	305坪5合	7万0265円
死体室（同）	12坪5合	2000円
薬局（同）	40坪5合	7695円
門衛所（同）	9坪5合	1710円
炊事場（二階建）	14坪	3220円
炊事場及浴室（平家建）	36坪	6660円
倉庫及便所（同）	43坪	6880円
周囲塀	延長220間	3572円50銭
周囲生垣	延長150間	1200円
電灯設備	一式	1850円
給水設備	一式	2380円
室内電話架設	一式	850円
通用門及構内排水工蒸汽鉄管工事	一式	9800円
設備費	一式	2万円
雑費		1万4535円
計31万3280円		

【大正11年度】

普通二等病室（二階建）	259坪	9万3240円
同（平家建）	77坪7合5勺	1万7882円50銭
法医学及薬物学教室（二階建）	70坪	1万9600円
便所及渡廊下（平家建）	21坪	3360円
一、三、四等病室及鎮静室（同）	311坪5合	71645円

寄宿舎及食堂浴室（同）	95坪5合	１万5757円50銭
倉庫及便所（同）	65坪5合	2880円
周囲塀	延長220間	3027円50銭（継続）
電灯設備	一式	3717円
給水設備	一式	5130円
室内電話架設	一式	950円
蒸汽鉄管及温管布設	一式	4256円90銭
保温巻工事	一式	708円60銭
設備費	一式	２万円
雑費		１万1675円
計27万3830円		
【大正12年度】		
外科二部診察室（同）	16坪5合	2475円
レントゲン室及病室係室（平家増築）	11坪	2750円
病室係室模様替		1050円
倉庫及便所（同）	65坪5合	7600円（継続）
電灯設備	一式	280円
給水設備	一式	320円
室内電話架設	一式	120円
蒸汽鉄管及温管布設	一式	250円
設備費	一式	９万円
雑費		700円
計10万5545円		

医専の費用は特別会計で処理され、いわゆる自給自足を旨としてきた。しかし、知事は昇格の準備として一般会計による支出を要求したのである[30]。同月15日、議案に対して一読会が開かれた。横山理事官は、1）昇格に必要なものの第一は予科教室、2）文部省当局の方針で、予科は別の場所に置くこと、3）敷地は期成同盟会が寄附、4）精神病舎が腐朽しているので（明治30年新築）、予科敷地に移転（10年度と11年度で半分ずつ）、5）昇格で必要となった薬物学・法医学教室を設置、6）外科が不完全なので、二部の診察室を設置、との説明を行った。

さらに第21号議案「大正十年度医学専門学校及附属療病院歳入歳出予算書」の一読会も開かれ、横山は1）歳入が増加するのは22号議案の建築借入金のため、2）授業料が減少するのは、医専が定員120名に対し大学は80名のため（文部省の方針）、3）予科教員9名を採用予定、4）昇格後、学用患者は100名まで収容（文部省の方針）まずは36名を50名に、との説明をした。これに対して今井治郎右衛門から、1）府の補助金3万6000円を一般会計からにしたのはなぜか、との質問があった。内務部長白男川譲介から1）昇格に伴う病院設備・予科などの増設に約70万円必要、2）府の補助金3万6000円は一般会計から、3）文部省から特別会計ではなく一般会計でないと大学とすることは困難といわれた、との説明がなされた。また、青木宗五郎から1）当初大学に昇格しても府からの支出は不要といっていた、との質問も出たが、横山は1）「大学令」で私立は100万円の基金が必要になった、2）公立は基金が不要だが、100万円の利子5分（5万円）程度の補助が必要、3）公立だからその必要はないと主張したが、文部省の意向に従った、4）多額の建築費などは病院の収入だけで償還できないという事情もあると説明した[31]。こうして昇格計画に係る一般予算が可決された。この間、文部省や府議の実地調査があった[32]。

これを受けて翌1921年1月25日、小川校長は馬淵知事あてに昇格に関する上申書を提出、1）医科大学設置要項、2）大学予科教室器具設備費、3）大学予科物理・化学・生理学教室設備費、4）各科教室設備費、5）自大正八年度至同十年度・自仝十一年度至十二年度増建築設計書、6）公債規則、7）自大正十年度至同十五年度予算書六冊、8）平面図面（年度区分色分ケ）を添えた[33]。今くわしく紹介する余裕はないが、1）に昇格条件として①3か年の予科設置、②現在の京都府立医学専門学校及び附属療病院の校舎并に病舎拡張、③これらに関する臨時費の借入金及び経常費に対する府費補助を挙げている。

2月には予科・精神病舎の敷地を大将軍鷹司町にすることが決まり、梶井町の精神病舎跡地（約600坪）は法医学・薬物学教室を新築することになった[34]。このころ知事は新聞社のインタビューに答えて、昇格は大丈夫だろうと述べている[35]。7月になって陞格期成同盟会は買い上げた2町2反5畝7歩3合8勺（6757坪3合8勺）を寄附、14日の参事会で受納が決定した[36]。予科生の募集も行われ、受験者600名余から102名が合格（定員は80名）、また医専在学生から25名が予科2年生に編入した。9月11日から本校内の仮教室で予科の授業が始まった。半年で1年分の授業であった。

この間、5月5日に知事は文部大臣中橋徳五郎あてに「公立大学設立ノ儀ニ付稟請」を提出し、正式に昇格の認可申請を行った[37]。

本府立医学専門学校ヲ公立医科大学ニ変更スルニ要スル経費予算ヲ客年通常府会ニ附議シ満場一致可決候ニ付、設立ノ儀御認可相成度、大正八年三月貴省令第十一号大学規程第一条ニ依リ別記事由並事項書相添此段及稟請候也。

事由

本府立医学専門学校ハ我国医学校中最モ古キ歴史ヲ有シ、明治五年京都市粟田青蓮院内ニ仮療病院ヲ開設シ、患者治療ノ傍、医学生ヲ教授スルニ濫觴シ、其ノ後数回ノ改革変遷ヲ経テ医学校トナリ、明治三十六年専門学校令ノ発布セラルヽニ及ヒテ同令ニ依リ現今ノ如ク京都府立医学専門学校ト称スルニ至レリ。此間卒業生ヲ出スコト弐千参百六拾名、内専門学校卒業生千四百七拾七名ニ及ヒ、其ノ出身府県ハ遍ク全国ニ亘リ本邦医界ニ貢献シタルトコロ尠カラス。創立以来カクノ如ク多年ノ日子ヲ閲スルヲ以テ設備内容亦年ヲ逐フテ整頓シ来リ、更ニ之ニ相当ノ経費ヲ投スレハ、大学ニ昇格スルモ他校ニ比シ敢テ遜色ナキノ域ニ至リ、之ヲ以テ大正七年大学令ノ発布以来、本校ヲ公立大学ニ昇格セントスルノ議アリ。大正八年通常府会ニ於テ満場一致ヲ以テ京都府立医学専門学校昇格ニ関スル別紙ノ意見書ヲ議決シテ、之ヲ本官ニ提出シタルヲ以テ、本官ハ其意見ヲ究シ客年通常府会ニ大学陞格ニ関スル経費予算ヲ提案シ、亦満場一致ノ議決ヲ見ルニ至レリ。聞クトコロニ依レハ政府ハ医育統一ノ目的ヲ以テ官立医学専門学校ヲ医科大学ニ陞格セラレムトスト。且ツ曩ニ大阪医学専門学校、愛知県立医学専門学校ノ大学ニ陞格セルアリ。公私立医学専門学校ハ全国ニ於テ跡ヲ絶ツニ至ラントス。此際本校ヲ昇格シテ単科大学ト為スニアラスンハ入学志願者ハ著シク減少スルノミナラス、現在仝校ニ在ル教授ノ大半ハ之ヲ失フニ至リ、其補充ニモ困難ヲ感スヘキハ言ヲ俟タス。随テ今日ノ隆運ハ衰微ノ悲運ニ激変スルノ已ムナキニ至ルヘシ。之レ我国最古ノ歴史ヲ有セル我医学専門学校ノ為ニ惜ムヘキモノタルノミナラス、亦我国学界ノ恨事ト云ハサルヘカラス。之レ府民ノ切ニ本校ヲ大学ニ陞格スルニ熱望スル所以ニシテ、又本申請ヲ為シタル事由ナリトス。

これまでの経緯を踏まえて昇格の意義と必要性、そして関係者の熱意を力説している。横山学務課長はさらに同月10日上京して文部省を訪問した[38]。

7月19日、第1回教育評議会が開かれ、京都府立医学専門学校と東京慈恵医院医学専門学校の大学昇格が附議された。当時、官立校の昇格をめぐって中橋文部大臣の食言事件が起こり、文部省は大学認可の乱立との批判も恐れていた。そのため官立の審議を後回しにして公私立の審議から始めることにした。なかでも2校が選ばれたのは、比較的設備が整っていたからである。文部省はそれまで昇格を審議していた諮問機関である臨時教育委員会を廃止し、7月9日に教育評議会を発足させたばかりであった[39]。それはともかく、松浦専門学務局長から理由説明がなされ、委員から基本金経費や教授力などについて質問があった。この日は具体的な審議に入らなかった[40]。同月26日、第2回教育評議会が開かれ、松浦局長から参考書類について詳細説明が行われた。委員から他校との比較や設備などについて質問があったが、結局研究材料不備のため審議未了となり、結論は秋に持ち越しとなった[41]。9月20日、第3回教育評議会が開かれ、松浦局長から卒業生の状況、図書の調査、校舎の設備などの報告がなされた。委員から多少の質問があったが、ようやく東京慈恵会医科大学と共に京都府立医科大学の設立が可決された[42]。ただちに会長岡野敬次郎は中橋大臣に答申した。これを受けて大臣は同月27日、原敬首相に上奏進達すると共に宸裁を仰ぎ、同月30日に首相が裁可を仰ぐに至った。そして、ついに10月19日昇格が認可されたのである[43]。同月15日には皇后陛下から金300円の下賜があり、これを元に勤続功労職員の表彰を行うことになった[44]。

官立の帝大は先の4校に北海道が加わり、5校が1919年に医学部を設立した。官立医専の新潟・千葉・金沢・岡山・長崎・熊本が医科大学に昇格したのは1922～23（大正11・12）年であった。私立は「大学設立認可内規」によって基本財産を現金または有価証券で供託する必要があったため、設置基準を満たすのが容易ではなかった。比較的財源の潤沢な慶應義塾が1920年に認可され、続いて東京慈恵会が本学と同じ年に認可された[45]。いずれにしても、公立の単科大学という厳しい状況のなか、もっとも早い段階での認可といえよう。

11月1日、創立50周年を兼ねて昇格記念祝賀式が大講堂で挙行された。午前10時半、君が代斉唱に続いて小川学長は50年の歴史の結晶として昇格があり、協力者に感謝するとの式辞を述べた。若林賚蔵知事の告辞、文部大臣中橋徳五郎（松浦文部省学務局長代読）・京都帝国大学総長荒木寅三郎らの祝辞のあと、功労者・勤続者の表彰が行われた。1300名を招待し、半数位と予想していたところ約1200名が集まっ

たので、全員総立ちで身動きもままならぬ状況であった。

11時過ぎ式が終わると、参加者は校庭の模擬店に移った。団子、うどん、おでん、ビールで大賑わいとなった。正午になると隣の饗宴場で昼食。折詰が足りず、急遽弁当が追加された。再び模擬店に戻り、あちこちで学生が教授や来賓を胴上げした。午後2時になると大講堂で学生の祝賀会が始まる。学長・学生代表の祝辞のあと饗宴場で盛り上がった。午後3時半から余興となった。筑前琵琶、手踊り、落語、活動写真などが披露される。

午後6時、来賓ら約200名は京都ホテルでの夜会に参加した。宴もたけなわになったころ、小川学長は起立して昇格の目的は達したが、われわれは三つの責任を負うことになった。一は学生の養成、二は患者の治療、三は学問の研究である。第一・二は自信のあるところだが、第三は不十分である。研究が一層充実するよう支援をお願いしたいと述べた。そのころ学生らは提灯行列を繰り広げた。校門から京都ホテル前、烏丸三条を経て京都御苑建礼門に至って万歳三唱して長い一日が終わった[46]。2日は午前9時から河原の校庭で大運動会が行われ、午後からは仮装行列に興じたという。

横山学務課長の述懐によると、文部省の松浦学務局長ははじめから好意的で、実地視察をした沢田書記官は京都出身で自分と東大の同窓生であったことから協力的であったという。第１回の教育評議会で保留になったが、それは同時に申請していた東京慈恵医院医専に不備があり道連れになったためで、本来はすぐ可決されるはずであった。同会では京都帝大の荒木総長がメンバーの一人で、他の委員に対して熱心に説明されたおかげである。馬淵前知事の尽力と共に感謝すべきであるとしている[47]。京都帝大医科大学が開設される際は本校の教諭が引き抜かれ、危機的状況になったと伝えるが、実際は円満に進められた[48]。荒木は祝辞で本学50年の歴史を高く評価し、「大学は研究を生命とし、修養を本能とす。唯夫れ理義と研究を積み、智徳の修養を累ね、学界を嘉恵し、世道に裨益して、始めて名実相背かずと謂ふ可し」と述べてエールを送った。良好な関係があればこそであろう。

年改まって1922（大正11）年1月31日、京都府立医科大学・予科学則（京都府告示第31号）が制定された[49]。特に授業の課程がきめ細かくなっている。たとえば解剖学は医専時代が理論、実習、局所解剖学、胎生学、組織学理論、組織学実習并顕微鏡用法であったのに対して、解剖学講義、解剖学実習、局所解剖学講義、解剖実物示教、胎生学講義、比較解剖学、組織学講義、組織学実習及顕微鏡用法となっている。予科

では修身、国語漢文、独語、英語、仏語、羅甸語、数学、物理学、化学、生物学、鉱泉学、心理学、法制経済、体操が履修された。

11月1日にはかねて工事中であった予科・花園分院の竣成式が挙行された。敷地は予科3200坪余、分院4200坪余で、工費43万6500円であった[50]。午前10時からの式では、まず小川学長が式辞で敷地が校友の寄附によるものであり、感謝すると共にわが学風として誇り得ることだと述べた。続いて池松時和知事、荒木京大総長らの祝辞があった。卒業生総代小笠原孟敬、学生総代楢原耕一、予科生徒総代山口吾一の祝辞もあった。式後、小学校選手角力大会、校内角力大会、芝居、外科手術活動写真などを催した。夜には提灯行列を繰り広げた。2日も小学生角力、学生芝居、模擬店などで賑わった[51]。

1923（同12）年4月16日、はじめて本科新入生を迎えたことから開学式を挙行した。小川学長は開学式宣言で本学の使命が「医学医術ヲ教習シテ其蘊奥ヲ研究シ、且学生ノ品性ヲ陶冶シテ、才徳兼具ノ人格ヲ養成」にあると述べ、学術の教習・研究、人格の修養、実地の練習に努めるよう諭した[52]。1925（同14）年4月19日には陞格記念碑除幕式が行われ[53]、一連の昇格事業は完了するのである。

4 おわりに

昇格運動は、医専のままでは廃校になるかもしれないとの危惧から出発した。小川学長らは医専と大学との相違を研究に求め、一層の飛躍を遂げるべく奔走し悲願を成就させた。もとより教職員や校友など学校関係者だけでなく、府や府民が一体となって昇格は実現したといえる。そして、それまで主として臨床医の養成を目的としてきたが、昇格後は臨床重視を維持しながら研究も行い、社会に還元させることになった。道徳倫理を重視した点も見逃せない。創立以来の伝統に大学昇格を積み重ね、本学は新たな道を歩み始めるのである。

---

[1] 吉川卓治「帝国大学との競合－京都府立医科大学の昇格運動」（同著『公立大学の誕生』所収、名古屋大学出版会、2010年）。

[2] 伊藤彰浩「大正期「高等教育機関拡張計画」をめぐる政治過程」（『教育社会学研究』第41集、1986年10月）。

[3] 海後宗臣編『臨時教育会議の研究』（東京大学出版会，1960年）。

[4] 天野郁夫「大学令と大正昭和期の医師養成」（坂井建雄編『日本医学教育史』所収、東北大学出版会、2012年）。

[5] 高梨光司『佐多愛彦先生伝』（佐多愛彦先生古稀寿祝賀記念事業会、1940年）。

[6] 『京都医事衛生誌』第298号（大正8年1月）。

[7] 同上、『京都日出新聞』大正8年1月12日付、『大阪朝日新聞 京都附録』大正８年１月13日付、『東京日日新聞』大正８年１月13日付。

[8] 『京都日出新聞』大正8年1月17日付、『校友会雑誌』号外第2号（大正8年7月）。

[9] 大阪朝日新聞 京都附録』大正８年１月13日付、『京都医事衛生誌』第298号（大正8年1月）。

[10] 『京都日出新聞』大正8年1月16日付。

[11] 『京都日出新聞』大正8年３月５日付。

[12] 『京都日出新聞』大正8年３月28日付。

[13] 『校友会雑誌』号外第１号（大正８年３月）に「全国校友諸兄に檄す」と題して以下を載せる。校友会本部「母校陞格運動に対して熱烈なる後援と溌溂たる運動を要望す」、会長・小川瑳五郎「本校陞格に就ての意見」、校外校友・小笠原孟敬「母校陞格問題を論じ校友諸氏の奮起を望む」、於母校校友・角田隆「母校陞格問題に関する経過及希望」、同・吉川順治「校友諸君の後援を望む」、同・常岡良三「母校陞格に関する卑見を陳べて校友諸氏の奮起を望む」、学生有志・浅田操「第三次危機迫る」、同・布施俊雄「弐千の先輩に訴ふ」、同・和泉正忠「単

科大学令適用に就て」、同・甲原斉「人は不平を有す」。『京都日出新聞』大正8年３月24日付、『京都医事衛生誌』第300号（大正8年３月）。

[14] 『京都日出新聞』大正8年３月27日付。

[15] 『京都日出新聞』大正8年５月17日付には長文の解説記事を掲載、京都に二つ目の医科大学となっても何ら問題ではなく、財源についても富豪の寄附によればよいとしている。そして、府立療病院の職員は病症の軽重にかかわらず丁寧で規則も厳格でないから多くの府民から支持されていると述べた。対して帝大は規則が厳重で態度も横柄であるという。

[16] 『京都日出新聞』大正8年４月３日付、『校友会雑誌』第85号（大正8年4月）、『京都医事衛生誌』第302号（大正8年5月）。

[17] 『京都日出新聞』大正8年５月６日付、『大阪朝日新聞 京都附録』同日付。

[18] 『京都日出新聞』大正8年５月27日付、『京都医事衛生誌』第303号（大正8年６月）。

[19] 『京都日出新聞』大正8年５月28日付、『京都医事衛生誌』第303号（大正8年６月）。『大阪朝日新聞 京都附録』大正８年５月28日付で、寄附は15万円の見込みであるし、1万坪の敷地を購入する予定と伝える。同紙同月30日付で、角田は募金活動への意気込みを語っている。

[20] 京都府議会事務局編『京都府歴代議員録』（京都府議会、1961年）。

[21] 『校友会雑誌』号外第2号（大正8年7月）。

[22] 『京都医事衛生誌』第304号（大正8年７月）、『京都医事衛生誌』第305号（大正8年８月）。

[23] 『京都医事衛生誌』第303号（大正8年６月）。

[24] 『京都医事衛生誌』第305号（大正8年８月）。

[25] 『医学専門学校及附属療病院建築一件綴』〈大10-68-1〉（京都府立京都学・歴彩館所蔵）には「伝染病舎」はじめ多くの工事関係書類が残る。

[26] 京都府会編『京都府通常府会・市部会・郡部会議事速記録』（大正8年）、『京都医事衛生誌』第309号（大正8年12月）。高橋は愛知県立医専を卒業後、油小路通松原上ルで開業した。岸田は京都府医学校卒業後、中筋通大宮西入で開業した。

[27] 同上。

[28] 『京都医事衛生誌』第320号（大正９年11月）。なお『大阪時事新報』大正８年11月２日付によれば、候補地として寺町通鞍馬口の角地1万余坪に決定し、所有者の佐伯理一郎に交渉するも、佐伯は1坪30円以下では売却しないと述べた。準備委員は1坪24円で交渉中という。同紙12月7日付では、予算15万円以内で買得できるところとして洛東日ノ岡あるいは田中村で選定中という。かなり早い段階から土地選定が行われていた。

[29] 『大正日日新聞』大正９年11月10日付。

[30] 『大阪朝日新聞 京都附録』大正９年11月14日・12月16日付、京都府会事務局編『京都府会史』（京都府会、1951年）。

[31] 『京都通常府会市部会郡部会決議録』〈大９-13〉（京都府立京都学・歴彩館所蔵）、京都府会編『京都府通常府会・市部会・郡部会議事速記録』（大正９年）、京都府会事務局編『京都

府会史 大正時代資料』(京都府会、1952年)。このほか予算における市と郡との負担率をめぐって議論があった(『京都日出新聞』大正９年12月19日付)。なお本学附属図書館所蔵文書に予算決定前の工事見積書・事業計画書・予算概括がある(D273・274「大学陞格事業一件」)。

[32] 『京都日出新聞』大正９年12月７・19日付、『京都医事衛生誌』第322号(大正10年１月)。なお『大阪朝日新聞 京都附録』大正９年12月1日付では、横山学務課長は予算が通れば認可は間違いないと考え、認可を得てから設備に着手しても予科生を収容できないとして、予科は来年９月から開設すると述べている。

[33] 『専門学校』〈大10-30〉(京都府立京都学・歴彩館所蔵)、『京都日出新聞』大正９年12月28日付、『京都医事衛生誌』第323号(大正10年２月)。

[34] 『京都医事衛生誌』第323号(大正10年２月)。なお『百年史』では病理、薬物、法医、第２外科教室の建築が文部省の調査による昇格条件であると述べる。しかし、『大阪朝日新聞 京都附録』大正９年11月29日付で、小川校長が「薬物学と法医学の両教室が不十分であつたので、之を充実する為めに目下建築に着手しつゝある」と述べているように、これらは学校側が必要としたものであり、要請された形跡は認められない。現に法医学教室は1947(昭和22)年の設立である。

[35] 『大阪朝日新聞 京都附録』大正10年２月11日付。

[36] 『京都医事衛生誌』第328号(大正10年７月)。ただし、陞格記念碑には6896坪余(6800円余)となっており合致しない。本学附属図書館所蔵文書(D272「大学陞格事業一件」)にも敷地買収費の一覧が残るが、面積・金額とも相違する。追加などが生じたのであろう。同文書には3月25日付の土地買収承諾契約書も残る。

[37] 『専門学校』〈大10-30〉(京都府立京都学・歴彩館所蔵)、『公文類聚』第45編第25巻(国立公文書館蔵)。

[38] 『大阪朝日新聞 京都附録』大正10年5月11日付。予科生の募集を7月に行い、9月から授業開始とし、6月には認可を得たいと考えていた。

[39] 『報知新聞』大正10年7月16日付、文部省編『日本帝国文部省第四十九年報』上巻(大正14年)、伊藤彰浩「五校昇格－大正期における官立大学昇格問題－」(『大学論集』第21集、1992年3月)。

[40] 『大阪毎日新聞』大正10年7月20日付。なお同紙7月19日付によると、私立大学昇格案などは審議されなかった。

[41] 『大阪朝日新聞 京都附録』大正10年７月27日付、『時事新報』同月28日付。なお『大阪朝日新聞 京都附録』同月21日付によれば、この日の説明のため医専の中道幹事が出席した(横山学務課長は病気のため欠席)。『八十年史』『百年史』では7月に昇格確実との内報があったという。しかし『京都日出新聞』大正10年7月28日付では昇格が頓挫したと表現しているし、29日付では気をもんでいた小川校長が「全く口アングリ」の状態であったと伝える。『時事新

報』27日付でも白紙に還ると評しているので、大きく落胆していたことがうかがえる。

[42] 『大阪朝日新聞 京都附録』大正10年９月21日付、『東京日日新聞』同日付、『国民新聞』同日付。

[43] 『公文類聚』第45編第25巻（国立公文書館蔵）、『京都医事衛生誌』第330号（大正10年９月）、「文部省告示」第471号（『官報』第2766号、大正10年10月20日）、『京都日出新聞』大正10年10月20日付。

[44] 『京都日出新聞』大正10年10月16日付、『京都医事衛生誌』第323号（大正10年２月）。

[45] 秋谷紀男「大学令と大学昇格基金問題－私学の大学昇格基金調達過程の検討－」（『明治大学史紀要』第10号、1992年12月）、吉田善明「国家管理のもとでの日本の大学の展開と崩壊－「大学令」の公布から「第二次世界大戦終了時」まで－」（『法律論叢』第83巻第1号）。

[46] 『京都日出新聞』大正10年11月２・３日付、『京都医事衛生誌』第332号（大正10年11月）、『校友会雑誌』第91号（大正11年4月）。

[47] 『京都日出新聞』大正10年９月25日付。人には虚栄心があるので、大学か医専かといわれれば大学を選ぶとしたうえで、医専のままであれば劣等生ばかり集まり衰微をきたすと述べた。ただし、当初京都はすでに帝大医科大学があるので昇格させることはないと見られていた。『大阪朝日新聞 京都附録』大正８年１月27日付、『東京朝日新聞』同日付。

[48] 八木聖弥「京都府医学校〈第二の危機〉をめぐって」（『醫譚』第112号、2020年12月）。

[49] 『京都医事衛生誌』第336号（大正11年３月）。

[50] 『医学専門学校及附属療病院建築一件綴』〈大10-68-2〉（京都府立京都学・歴彩館所蔵）にくわしい設計書・仕様書などが残る。予科の建築には太田市之助（上京区千本通下立売下ル）があたった。

[51] 『京都日出新聞』大正11年11月１・２日付、『京都医事衛生誌』第344号（大正11年11月）、『校友会雑誌』第93号（大正12年4月）。

[52] 『京都医事衛生誌』第349号（大正12年４月）。

[53] 『京都日出新聞』大正14年４月17・18日付、『京都医事衛生誌』第373号（大正14年４月）。碑については『八十年史』にくわしい。この日、同会は解散式を行ったが、母校維持のため大正11年3月に奨学会を設け募金を始めた。１口100円、期日は10月末とし、一定額が集まれば法人にする予定であった。しかし、大学が皇后陛下の下賜金で奨学資金をつくったため、同14年3月募金を中止した。本学附属図書館所蔵文書（D276「京都府立医科大学期成同盟会書類」）、『京都日出新聞』大正11年５月11日付、『京都医事衛生誌』第338号（大正11年５月）。

本稿執筆・講演の機会を賜った奥田司教授ならびに資料閲覧でご支援いただいた西山正俊附属図書館事務長に厚く御礼申し上げる。

記念座談会 I

世界トップレベルの医学・医療を京都へ

それは大学昇格を決意した日から揺るがぬ本学の精神そのもの
～これまでの100年から次の100年へ、いま、橋をかけるとき～

学　長　竹中　洋

病院長　夜久　均　（心臓血管外科教授）

大学昇格100周年記念事業準備・実行委員会委員長　奥田　司　（分子生化学教授）

学友会理事　石丸 庸介　（医療法人社団 石鎚会理事長）

明治・大正期、医学教育の世界にイノベーションを起こす

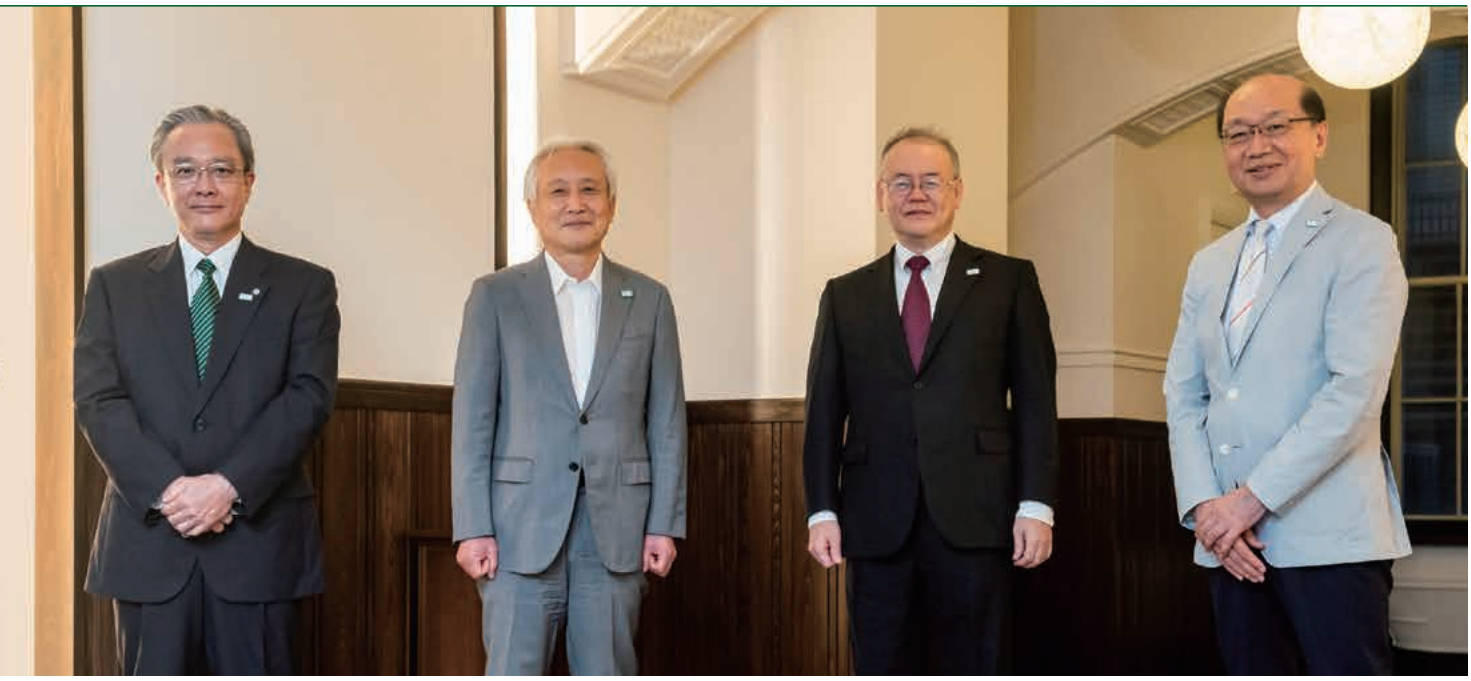
奥田　お忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。ぜひ今日は忌憚なく、ご自由にお話しいただければと思います。まずは学長、150年前の本学の創立と100年前の大学昇格のいきさつをどのように捉えておられますか。

竹中　いずれにも困難のあったことは間違いないですが、その困難さの質が違うように感じています。大正7年に公布された大学令には、多分に大学はこうであってほしいという国の希望が反映されていて、それに当てはまっていたのが、国立総合大学たる帝国大学です。そこに公立で単科の京都府立医学専門学校が大学に昇格しようと思えば、国が決めた基準に合う形で申請をし、認められなければならない。当時の先生方や京都府は大変なご苦労をされたと思います。一方で京都療病院に始まる京都府立医学専門学校創立の時期は、東京遷都で京都がさびれていく、天然痘やコレラ等の感染症が流行る、これは国を興し、京都を興すためにも西洋の科学を積極的に取り入れるのだという、精神的にも前向きにどんどんと進んでいける背景があったと思いますね。資金面などさまざまな問題はあっても、何か基準があるわけではなく、府民・市民にも理解のしやすいものであったでしょう。

学長
竹中　洋

奥田　医学校の創立は白いキャンパスに絵を描き、大学昇格は基準というハードルを乗り越えていく、というイメージですね。

夜久　ハードルといえば、本学存続の危機を乗り越えねば、という意識も大きかったでしょう。明治32年に京都帝



国大学に医学部ができて、我々の甲種医学校の医学士教諭[1]がたった2名を残してそちらに移ったという事実もあり、これでは学校が成り立たず存亡の危機に瀕しました。また、帝国大学医学部と医学専門学校とでは医学教育が違いダブルスタンダードとなっており、もしかしたら当時は、教職員には帝大医学部に対して劣等感のようなものがあったかもしれません。それを校友会（現在の学友会）や学生が声を上げ学校を動かした。その校友会の先生方、教員そして医学生達の母校愛と自負を、100年後の私たちは忘れてはいけないと思います。大正10年11月1日には大学昇格の式典を、創立50周年の祝いとともに行って、提灯行列が出たほどに盛大だったというのも、思いを結実した先人らの喜びを伝えています。

石丸　今回、この座談会を前に私なりに調べてみたのですが、先生がおっしゃった旧帝大への対抗心や医学生としての誇りがものすごくあったのだと感じます。帝国大学令が公布され、次に大学令が施行されて本学は東京慈恵会医科大学（註 以下この記事では慈恵会医大と記す）とともに昇格を果たしました。これは帝国大学を含めて全国で9番目のこと。一方でさまざまな定義があるかと思いますが、「西洋医学をしっかりと教育する機関」であること

病院長
夜久　均
（心臓血管外科教授）

を前提とすれば、江戸末期に遡る長崎大学や東大、阪大の次、実に4番目といえます。近代化、西洋化を進めようとした時期に、我々は医学の分野で日本を引っ張り、旧帝大と肩を並べて歴史を刻んできました。坂の上の雲の時代に先輩方はさまざまなイノベーションを起こし、大学昇格を実現し今に至るのだということを、もっともっと我々はよく勉強しないといけないと感じます。

スペイン風邪の制圧に
立ち向かいながら悲願の大学昇格へ

奥田　医学校校長で初代学長の小川瑳五郎先生[2]も、大学昇格を逃せば学校消滅の危機があると強く感じておられ、府や府民もその思いを共有していたように思うんですね。当時、京都療病院では、往診や、夏季休暇中の診療を行い、地域の人に高い支持を得ていたことも力となったはずです。

夜久　まさに地域に愛された療病院であり医学校であったと思います。大学昇格の頃はちょうどスペイン風邪の大流行期で、京都府でも感染者が40万人以上、死者が1万人以上出て、療病院は野戦病院と化し院内感染とも戦いながら、病院長でもあった小川先生は「天職を全うしなければならない。人命救助を越えた人道戦だ。」とスタッフ一丸となって奮闘された。そのような過酷ななかで国や府と大学昇格のため交渉を重ねるというパワーにはただ頭が下がります。

竹中　帝国大学医学部は、卒業生が次の教育・研究・診療を担うという学問の体系を作りました。その意味でも、大学に昇格するということは自分たちで自分たちの大学を運営していけるということであり、そこにも大きな意義を感じておられたのではないでしょうか。

奥田　論文を寄稿していただいた八木聖弥先生[3]も、「小川先生は人材を育て、研究を推し進めて医療の進化に貢献する」ことに重きを置いておられたとおっしゃっています。

石丸　150年、そして100年存続してきたのは小川先生を初めとする先生方、学友、地域の意欲と支えがあってこそだと思いますが、実は稀有なことなのかもしれませんね。確か明治21年以降、「地方税を以って支弁することを禁止する」とされ、大学昇格までに廃校になったところが多かったと聞いています。

竹中　大阪府医学校が阪大に吸収されるプロセスもそうです。そこを乗り越え、地方税で運営できる公立の大学として誕生し、存続してきたわけですね。しかも単科で。

夜久　当時の文科省はむしろ、京都府に運営費交付金を付けることを条件に認めたということがあって、これは帝国大学と同じ仕組みを作ろうとしたことであり、大学昇格とその後の発展的継続はまさに府としても悲願だったことがわかります。

大学昇格100周年記念事業準備・実行委員会委員長
奥田　司
（分子生化学教授）

学友会理事
石丸 庸介
（医療法人社団 石鎚会理事長）

水系感染症から老化のメカニズム解明まで時代の課題に挑む

奥田　話題を少し変えて、本学がこの100年の間に主にどのような健康障害に対して取り組んできたのかを振り返りたいと思います。1930年代には京都では赤痢や腸チフスなどの水系感染症が多く、また大きな鉄道事故では法医学も活躍したと聞いています。戦中・戦後は やはり結核ですね。

竹中　水系感染症には本学の衛生学教室が重要な役割を果たしました。衛生学的観点がきちっと成立する過程をまず京都で踏めたのは、本学の実績だろうと思いますね。感染者が東京、大阪よりも多く、本学も府も特に力を入れたのではないでしょうか。

夜久　京都は地下水が豊富で水がきれいで、お茶の文化も京都だからこそ起こったと言えますが、それが仇になった側面もあるのではと思われます。

竹中　確かに。京都では明治45年に第二疎水が完成して水道が敷かれましたが、私の幼少期は下京区ではほとんど井戸を使っていましたからね。それで感染症やもしかしたら乳幼児の死亡率が高かったのかもしれません。

石丸　そういえば僕が入局した当時も、京都では新生児・乳児の死亡率が高かったそうです。当時本学の教授であられた澤田淳先生（1961［昭和36］年卒）や京都第二赤十字病院小児科部長を務められた水田隆三先生（1961［昭和36］年卒）が懸念されておられましてね、それで「周産期母子医療センター」などのシステム作りにご尽力され、大幅に改善されました。本当に偉大な先生方です。

竹中　さらには平成になりますが、「脳・血管系老化研究センター」の設立も特徴的です。国の施策の方向性も見ながら、老化のメカニズムを解明すべく、ここに旗を立てられました。

夜久　少子高齢化いう言葉が盛んに使われ始めた頃で、それに先んじて設立に動いたわけですよね。

竹中　そうです。今後も我々は社会情勢を判断しながら、今とこれからに本当に必要な部門を積極的に作っていく必要があるでしょう。

奥田　本学は、単科大学でありますが、戦後は医学全般をカバーする医育機関としてさらに力を付けてゆき、医学・医療の各分野に人材を配して発展を続けてきたということですね。基礎医学、社会医学、そして臨床医学部門はそれぞれ着実に業績を積み上げているという認識かと思います。看護学科と合流したかたちの医学部になりました。そのうえで時代のそして地域の特別な要請に応える、あるいは地域全体で力を合わせる、ということも果たしてきたと思います。先ほどのお話に出てきた「周産期母子医療センター」や「脳・血管系老化研究センター」、そして現在の重要な課題である新型コロナ感染症対応などをそうしたかたちの活動として挙げることができるかと思います。お話してきましたように、本学は自由な人材の輩出と社会のニーズに応えるという理念がかみ合い、地域医療を守り医学の進歩に貢献する意気をそれぞれが感じながら発展してきたのでないかと感じます。

学友会など縦のつながりを再構築するため、なすべきことは？

石丸　ぜひ学友会の話もと思うのですが、ここ数年特に卒後すぐの人があまり活動に参加していただけないことが話題になります。学生時代の経験は人格にも人生にも大きく影響しますし、その大事な時期に同じ釜の飯を食った仲間との絆の太さは年齢がいくほどに感じられるもの。学友会は日々忙しくしていても、理由がなくても集まれるきっかけをくれる組織なのですが、僕もそうでしたが、若い時にはピンとこないのかもしれません。

奥田　八木先生の印象としては大学昇格を果たし100年間存続できたのは、「縦・横の結束力の強さ」だと。それが最近では、同級生の間では結束が強いけれども上下ではそれがあまり見受けられないのかなと感じます。最近の若者気質というのでしょうか。

夜久　部活のOBを通して学友会が身近になるということもあると思うのですが、最近はカリキュラムが厳しくてクラブ活動も6年間ではなく4年間と短縮の傾向です。ク

ラブって実によくできているひとつの社会で、上は80歳から下は18歳までが、ある意味同じ目的を共有することによってつながりを持てるし、人生を学ぶこともとても多いのですけど。

竹中　そうですね。それがクラブでなくても良いですが、たとえば確かに西医体で勝つぞ！とか、ある一定のストレスを受けて同じストレスを持つ者同士が集まって団結をするということがあるように思います。今の学生さんにはそういうストレスが見えないですよね。共有や共感のプロセスの変化とでもいうのでしょうか。情報化が進んで、見ず知らずの人ともつながれて、自分の範囲だけで自分の分身を作ることは得意だけれど、みんなで集まってそこで自分の分身を作ろうというのが非常に下手だし、小さい頃からやってこなかったのでないかと思います。

石丸　人とのつながり方が本当に全然違いますよね。僕なんて京都府立医科大学ラグビー部卒と思っているくらいですが（笑）。国家試験の勉強を始めたのも6年生の西医体の夏合宿のあとでした。

竹中　そういう時代でしたね。医師免許を持ってからもいろいろしんどい思いをして成長するのですが、今はそういうのを3回生くらいで味わっているのではないかと思います。それに入学前の教育構造が二重三重になっていて、どこの進学塾の医系コースに行っていたかでグループになったりするのですね。だから学生時代にもう一度揺さぶらないと、本学で学んだ自負、そこで学んだ学友同士のつながりに誇りを感じてもらえるないかもしれません。

石丸　それには積極的な情報発信も必要ではないでしょうか。

夜久　SNSでの広がりは確かにすごくて、カリキュラムや専門医プログラムにしても、丸裸にされるんですよ、横のつながりで。彼らはそれを見ながら、こっちで研修したいとかいうことになって、情報共有という意味ではいいんだけど、それで評価を下されるというのは我々にとっては厳しい（笑）。

石丸　偏った情報が独り歩きすることもありますしね。だからこそ、こちらから発信することがとても大切だと思うんです。先人のご苦労や本学の実績、社会への貢献を通して素晴らしい大学であるという情報発信を、学友会としても推進したいと考えています。歴史が長くなるほど伝えることの比重は大きくなると思いますし、今までより今、そしてこれからの100年、いかに伝えていくか。それが絆を生むことにもなるのではないでしょうか。

奥田　いかに本学のよさを知ってもらい、母校愛を育んでもらえるか。

竹中　ぜひとも取り組まなければならない課題ですね。

慈恵会医大との定期戦、西医体も本学の長い歴史を物語る

奥田　運動部では、昭和初期から慈恵会医大との定期戦が続いています。遠く離れた地にあってまったくなりたちの異なる両校が、同時期に大学昇格をしたことを奇縁として、兄弟校・姉妹校のような関係を続けています。先生方にも思い出がおありではないでしょうか。

夜久　私は硬式テニス部でしたが、環境がずいぶん違うなぁと。定期戦のあとに六大学戦がありましてね、関東が東大、慶応、慈恵会医大、関西が京大、神戸大、本学でした。慈恵会医大との定期戦のあとに、関東であるときは六大学戦のためにいつも山中湖に移動となっていました。慈恵会医大の学生の車で中央自動車道を移動するんですが、ええ車に乗ってるんですよ（笑）。それに小学生の頃からテニスをしていたり高校で全日本ランキングの付いている学生がいたりで、すごく強いんです。

石丸　ラグビー部でも慈恵会医大には立派な更衣室があって、初めてお湯のシャワーを使ったのが定期戦でした（笑）。ラグビーは今でこそワールドカップや全国大会もありますが、オックスフォードとケンブリッジのような対抗戦が本来ですから、慈恵会医大との定期戦は西医体と並ぶメインイベントでした。

奥田　教授陣も意見交換やディスカッションを通して励みになることが多く大変有り難いですよね。私たちがとても大切にしている交流ですよね。

竹中　慈恵会医大とは毛色が全然違っていて、学校を創

設した高木兼寛氏が海軍病院に勤務しイギリスに学んだ方ですから、教育から医療からすべてがイギリス式でした。本学とはずいぶん違うからこそ肝胆相照らす関係が築けたのかもしれません。

奥田　この交流をぜひ若い世代も続けてほしいものです。ところで、西医体がどうして始まったか、ということについて学長からの新情報があります。

竹中　恩師である藤本守先生[4]の手記で知ったのですが、第二次世界大戦が終わったあと、旧制大学から新制大学に移る時期に予科に残っていた学生たちが、大会をやろうと。神戸大学の前身である兵庫県立医科大学、当時の大阪医科大学、それに本学で、ラグビーならラグビー、野球なら野球をそれぞれのグランドでやって、総合点を競う総合体育大会を敢行しました。それが西日本医学部学生総合体育大会の始まりで、昭和23年頃から7、8年をかけて移行したようです。

奥田　今では44大学が参加する大会の創始に本学が深く関わっていたとは驚きました。

竹中　今も当時のままに大学として続いているのは本学だけというのも感慨深いですね。

リサーチマインドと人間愛で地域から医療の進化を支えよう

奥田　最後に、これからの100年を我々はどのように歩んでいくべきなのか、ご意見をお聞かせください。

竹中　今ほど地方創生、すなわち地方に目が向けられている時代はないのではないでしょうか。京都府立を掲げる我々は、この京都で本当のいい医療を提供していくことが第一。そのなかで本学の特性ともいえるリサーチマインドをいかに生かしていけるのかということが重要でしょう。小川先生が大学昇格にあたり、研究の推進を目指すと言われた姿勢がそのまま残っているのが本学です。その特性を生かすことで、飛躍する可能性はまだまだあるはず。それには地域をどう見るのかが大事で、地域の課題をどうつかまえて研究に展開していくのか、そこから何を生み出すのか。そういうチャレンジと研究への意欲がある限り、次の1世紀も私は楽観視しています。

石丸　思い出すのはラグビー部の佐野元学長が、折に触れて「国立大学には絶対負けるな！」と熱弁されていたこと。当時はラグビーのことだと思っていたのですが、それは我々の存在意義ゆえなんですね。学長がおっしゃった通り、我々は府民に寄り添い、京都の医療の発展を何よりも考える。そこから研究も派生するからこそ府民にも身近だし、実際に前線に立って府民の健康と命を守ってきた確固たる自負と伝統があります。スペイン風邪から100年、そして今はコロナ禍ですが、我々はどんなときにも府民の期待に応えるべく、府民の目線で医療に向き合い続ける原点こそ大事だと思います。また本学には多様性に富む人材と、それを受け入れる寛容さがあると感じます。日本の医学界をリードする先生方はもちろんのこと、精神科医であり音楽家の北山修先生（1972［昭和47］年卒）や映画監督の大森一樹先生（1980［昭和55］年卒）、他にも多士済々の先輩方がおられたとお聞きしています。そうした多様性と寛容さはこれからの時代も本学の強みとなるでしょう。伊集院静さんの「ミチクサ先生」という小説の中で、夏目漱石が築山を指さして、「学問も人生もいろいろなところから登ったり、途中で転んで滑り落ちたりするほうが、てっぺんから見る風景は格別なんだ。道草もいいもんだ」というようなことを言うんです。自分なりの頂きを目指そうとする学生がいていいし、価値観の多様化する社会で活躍できる人材として巣立ってほしいと願っています。

竹中　佐野先生の時代は公立の国立化というのがあって、いわゆる二期校化ですね。今は違いますが当時の東京医科歯科大学と東大のような関係が囁かれ始めていて、「いや、それはしない」という意思表示もあったのでないかと思います。

奥田　創立以来、国立化の波は何度かあったようですね。それと多様な人材として、私は伊良子清白先生[5]を挙げたいと思います。岩波文庫に詩集を上梓するほどの詩人でありながら地域医療に貢献し、往診の途中で亡くなった人間愛の人でした。それは私たちの生き方のひとつのモ

デルのように思います。夜久先生は次の100年についてはいかがですか。

夜久　先生方のおっしゃられたように、本学の持ち味を忘れないことが肝要だと思います。それは何かといえば、本学の理念にあるように“地域”。京都の西洋医学は鳥羽伏見の戦いの際、外国人医師が傷を負った兵士に外科手術を施したことに始まり、本学の起源である療病院はこの医学を採り入れ天然痘や感染症に立ち向かいました。大学の理念である「世界トップレベルの医学を地域へ」は、建学の精神を見事に一行で表しています。これさえ忘れなければ本学は安泰でしょう。

奥田　ありがとうございました。今は公立大学が増えて、そのかなりの割合が医療系だそうです。医学・医療を地方自らが支える時代が本当にやってくるのだと、我々はそのパイオニアであることの誇りと使命感を持ち、地域の人の誇りにもならなければいけないと思います。地域医療と研究に身を置く覚悟のある人材を育てるなかで、先人の苦労を学び指針とすれば、道を誤らないのでないか、本日、改めてそんな風に感じました。

竹中　ここからいよいよ、新しい100年の始まりですね。

委員会註

1) **医学士教諭**　当時、東京帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部）を卒業し「医学士」の学位を取得している医学校教諭のことを「医学士教諭」と呼んだ。1882［明治5］年に文部省が制定した「医学校通則」によって、無試験で医術開業免許状が与えられる「甲種医学校」の認可のためには医学士教諭を3名以上採用していることが義務付けられた。他の都道府県と異なって、当時、京都では医学士教諭が払底したと伝わる。

2) **小川瑳五郎**（1876－1951）、医師（内科）・医学教育者。大阪生まれ。大阪府立尋常中学校（現 北野高校）、第五高等学校、そして東京帝国大学医科大学卒業（1902［明治35］年）。成績優秀にして大学在学中は特待生に選定され、卒業時には銀時計を授与された。長崎医専教諭、ドイツ留学を経て1914［大正3］年、京都府立医学専門学校教諭（内科）。1917［大正6］年には同校長に就任し、1921［大正10］年の大学昇格の中心人物として活躍した。大学昇格後は初代学長に就任し、1926［大正15年］年まで在任した。本学所蔵の肖像写真については本冊子の口絵を、そして大学昇格の経緯は本冊子の論文「大学昇格への道（八木聖弥）」をそれぞれ参照のこと。その後、兵庫県立神戸病院院長（1928［昭和3］年就任）、新設された兵庫県立医学専門学校の初代校長（1944［昭和19］年～1946［昭和21］年）、そして新制兵庫県医師会の初代会長（1947［昭和22］年就任）を歴任した。1951［昭和26］年逝去の後、ご遺体は医学教育のため献体され、今も神戸大学医学部に伝わると聞く。

3) **八木聖弥**（1958- ）京都府立医科大学准教授、医史学を専門とする文化史学のエキスパート。1958［昭和33］年京都市生まれ。同志社大学大学院出身。1986［昭和61］年 同志社大学講師、2002年 京都府立医科大学助教授、2007年 同准教授、現在に至る。主要著書としては「太平記的世界の研究（思文閣出版）」、「近代京都の施薬院（同）」など。医科大学で教鞭をとりつつ多数の著書・論文を発表している。京都府立医科大学 大学昇格100周年記念式典で基調講演を担当。本冊子では論文「大学昇格への道」を執筆。

4) **藤本 守**（1931-2017）医師・医学教育者・腎臓生理学を専門とする基礎医学研究者。園部中学（現 府立園部高校）出身で本学予科・本科を経て1955［昭和30］年京都府立医科大学卒業。米国留学の後、本学第一生理学にて助手・講師を歴任、そして岐阜大学医学部助教授（生理学）を経て1973［昭和48］年大阪医科大学 第二生理学講座教授に就任。腎機能に関する一般生理学分野の研究を展開するとともに、パッチクランプ法など分子生理学的手法をいち早くとり入れ、チャネルやトランスポーターの研究にも踏み込んだ。大阪医科大学で多くの後進を育てるとともに、1995［平成7］年から1999［平成11］年まで学長として大学運営に貢献した。

5) **伊良子清白**（1877- 1946）詩人、医師。本名は暉造。本学（医学校時代）1899［明治32］年卒業。詩集「孔雀船」は岩波文庫に収載。本学の学歌の作詩を行った。清白についての詳細や学歌制定のいきさつは本冊子記事「学歌制定について」を参照いただきたい。

医科大学の予科誕生と戦後の教養教育
－記念誌の拾い読み－

神経発生生物学　小野勝彦

2016年に竣工した下鴨キャンパスの教養教育共同化施設「稲盛記念会館」。2021年撮影。
この3階に医大教員の研究室、理科系実習室、コンピュータールーム、学生のロッカールームがある。また、2階には医大講義室8室が、1階には事務室がある。

本年2021（令和3）年は、京都府立医学専門学校から京都府立医科大学への昇格100年目にあたる。この大学昇格時に予科が設立されており、100周年を機会に予科から本学の教養教育／初年次学生への教育の流れを眺めてみたい。

療病院内に京都療病院医学校ができた1879（明治12）年に、「医学予科校」ができており、その時期の予科は、ドイツ語とラテン語および数学の教育が中心であったようである（『百年史』p.50）。しかし、専任の教員が任用されているという記載は見られなかった。したがって、現在の教養教育の源流は、医科大学昇格の予科に求めるのが妥当と思われる。予科は、戦後の学制改革に伴い1951年に廃止され1955（昭和30）年に進学課程となり、大学設置基準の改定に伴い1996（平成8）年には教養教育と名前が変わった。予科から教養教育への変遷とその間のできごとを、四冊の創立記念誌（『八十年史』、『百年史』、『百二十五周年記念誌』、『百三十五周年記念誌』）などを拾い読み、引用・再掲という形で記載したい。

1. 大学予科の誕生とストライキ

1921（大正10）年に、京都府立医科大学となり、これに伴い大学予科が設置された。この時、ドイツ語、化学、国語、生物学、数学、物理学に教授が着任された。予科の修業年限は3か年である。予科は、多くの卒業生の寄付によって購入された花園の地に置かれることが決まった。そして、待望の予科校舎は大学昇格翌年の1922（大正11）年5月にほぼ完成した、とある。『百年史』の写真からは、木造2階建てと思われる（写真、次ページ左）。この建物が、1972（昭和47）年まで使われた。改築前の老朽化した建物は、「外観が原爆で焼失した広島海軍病院に似ているので、映画のロケに使用された」そうである。現存する花園学舎もその最後のころには、図書室が刑務所のそれに似ているということで、当時のスマップの草彅剛らが来てテレビドラマ「スペシャリスト」のロケに使われたことがあった（平成11～12年頃）。

予科での勉学が始まるとすぐに、内規（現在の履修規定などに相当すると思われる）が改定された。出席に対する基準は厳しくなったようで、それまでの「授業日数の3分の1以上欠席した者は、学期末試験を受験できな

左：1972年当時の進学課程の校舎（『百年史』より再掲）。予科から使われている建物と思われる。
右：1972年に竣工した花園学舎本館。2008年撮影。玄関正面に、昇格記念碑の「ライオン像」がみられる。

い」から「各科目ごとに3分の1以上欠席すれば、当該科目の受験資格がない」に変わった。文面からは、3分の2以上「登校」すればよかったのが、それぞれの科目で3分の2以上の「出席」が求められることに変更されたものと思われる。これに腹を立てた予科の学生（一期生）は、当時の予科主事（教養教育部長に相当すると思われる）の辞職を求める決議文をつきつけ、等持院に立てこもってストライキを敢行した（『百年史』p.149）。1923（大正12）年6月下旬のことである。

最終的には、学長代理（学長は外遊中）の調停により、学生側は決議文を撤回するとともに、大学側は学期末試験を9月に行うことで解決した。今も昔も、大学生は講義をさぼりたいものということがよくわかる。

2. 進学課程の設置

大学予科は、戦後の学制改革・新制大学の発足とともに1951（昭和26）年に幕を閉じた。本学では、他大学の教養課程修了者を選抜して入学させることとした（『八十年史』p.407）。入学試験の歴史でも、1952（昭和27）年から1954（昭和29）年までは、「専門課程」への入学試験となっている（『百年史』p.296）。幕を閉じる前に、予科の教授はこの年の3月までに全員退職し、予科閉校式の後、校舎は空き家となった。1955（昭和30）年まで、花園の校地には空白の期間がある。空き家となった予科校舎は、昭和29年から1年間、府立高校の校舎として利用された。

予科から進学課程の移行については、『百年史』には詳細な記載はなかった。そこで、一般的な話としての戦後の学制改革の中の医学部と進学課程について検索サイトなどから以下に抜き書きした。新制大学の医学部において、入学資格は「大学2年修了者で特定の要件（科目および単位が規定された）を満たすもの」となった。このため、総合大学の理学部では、医学・歯学部受験コースである2年制のコースを「理学部乙」等として設置したところもあった。しかし、この制度では、理学部内に医学部進学希望者が溜まるという問題が生じ（『金沢大学50年史』第四章）、その結果、医科大学が独自に進学課程を併置することができるように制度が改まった。

本学でも、予科の廃止から数年のうちに進学課程の設置が決まり、ここに6年制の京都府立医科大学が誕生した。進学課程の設置が決まると、英語、ドイツ語、人文科学、社会科学、数学、物理学、化学、生物学の8つの教

室ができ、8人の教授が着任された（人文科学と社会科学は助教授からスタート、昭和45年に教授に昇任）。空き家となっていた予科校舎は、再び医大の新入生を迎えることになった。1955（昭和30）年4月のことである。1972（昭和47）年7月には、現存する花園学舎本館が進学課程の校舎として竣工式を迎えることになる（写真、前ページ右）。

3. 進学課程の仮進制度と大学紛争

昭和40年代に入ると、全国の医学部ではインターン制度や登録医制度が問題化し、授業ボイコットやストライキが頻発するようになった。本学では、これらの問題に加えて、進学課程の仮進制度に対する問題がからんで、複雑な様相を呈していたようである。以下に『百年史』からまとめたい（同誌pp.320－324）。

仮進制度は、2年間の進学課程を終えるために必要な単位（99単位）を一定数（14単位）未修得で残していても3年生に進級でき、残った単位は卒業までに修得すればよいという制度である。進学課程ができた当初からあった制度であるが、進学課程設置から10年もたつと単位を安易に残して仮進級する学生が増え、30～40%がこの制度で専門課程に進級するようになった。仮進級した学生は、専門課程の勉学に専心できず、最終学年ですべての臨床科目を受験して卒業する学生の数が増加してきた。臨床担当の教員は、自分の科目だけで1年間卒業を遅らせることに同情的感情が入り、試験結果に対してルーズになる（甘くなる）気風を生み出した。

このような問題を背景に、1965（昭和40）年に仮進制度は一旦廃止が決定された。その結果、進学課程から3年への進級で留年生は昭和41年には35名、翌42年には41名と大幅に増加した。このことは学生のみならず、大量の学生を抱えることになった進学課程の教員にも大きな不満を生じさせた。仮進制度を復活させるか、進級に必要な単位を削減するかという議論が続いたが、容易にはまとまらなかった。そこには、制度の問題のみならず、教員間の感情的対立や不信感が根強く介在しており進学と専門の間に溝が生じていた、とある。

1968（昭和43）年11月に、仮進制度の一部復活はやむ無しということになり、残してもよい単位数を減らしさらに試験の成績も加味して、3年生への進級を認めることとした。教育内容についても、カリキュラム協議会を設けて検討することにした。しかし学生は、旧来の仮進制度の全面復活を求め、さらにカリキュラム協議会での学生側の教授会に対する拒否権を求めた。当時の学生部長や教育委員は、12月に入ってからも相当長い時間をかけて学生と討議を行ったが、拒否権については解決しなかった。そのほか様々な問題が複合的にからんで1969（昭和44）年から、紛争が始まる。時はまさに東大安田講堂事件の前後にあたる。この年の3月には、本学の新入生には自宅待機が通告されている。

この続きは『百二十五周年記念誌』が参考になる。大学紛争時の教育内容軽減の要求から、受講時間数は2100時間から1830時間に1割程度減っている（同誌pp.45－46）。仮進制度は「持ち上がり制度」として維持されているようで、進学課程の単位は4年生の終わりまでにとればよいことになっている。

単位数については記載によりまちまちとなっており、当時を知らない者の記述としてご容赦願いたい。

4. 進学課程から教養教育、そして令和へ

大学設置基準が1991（平成3）年に大幅に改定されると、本学では1994（平成6）年に進学課程の名称が廃止され、「教養部」と仮称されていた（『フマーナ』28・29あとがき）。これが1996（平成8）年に、教養教育と称されるようになった。6年一貫教育の初めの部分を担い、また独立して教育するものではないので、「課程」を付せないという議論があった（『フマーナ』30あとがき）。また、この年のカリキュラム改定で、教養教育の期間が1年6か月となった。この前後からの教養教育の変遷も、上述の『百二十五周年記念誌』に詳しい。

2014（平成26）年には臨床実習の72週化にともなうカリキュラム改定で、教養教育にかかる期間は1年に短縮された。この年に教養教育の場は、花園キャンパスから下鴨キャンパスの稲盛記念会館へと移転し（54ページの写真）、月曜日午後のみではあるが、京都府立大学と京都工芸繊維大学との三大学教養教育共同化が始まった。京都三大学教養教育共同化ができるいきさつについては、『百三十五周年記念誌』に当時の花井一光教養教育部長が記されている（同誌pp.24－25）ので興味のある方は開いてほしい。

進学課程でも教養教育でも、医学部に入学しながら医学に触れない1～2年生の時期には、学生の不満は同じである。このため、様々なカリキュラム上の工夫が行われ、医学特別講義（1988～1994年）に始まり、進学課程の各教員の専門に触れるゼミ形式の授業（1988～2013年）、さらに総合講義の医学概論実習が始まり（1996年から）現在の早期体験実習IIに続いている。また、2019（令和元）年からは、安心安全の医療を知るための統合授業や、医療者や先輩の後ろにつくシャドーイングにより多職種連携を学ぶ早期体験実習Iも始まっている。

医学教育では、21世紀になって「医学教育モデル・コア・カリキュラム」ができ、2016（平成28）年の改定で、教養教育の扱いを定めていた「準備教育モデル・コア・カリキュラム」がなくなった。これに伴い、本学でも令和3年7月の時点で、教養教育ならびに教養教育部長の扱いが議論されている。2017（平成29）年には6年一貫教育を調整する教育センターが設置され、ここで上記の1年生に対する医療にかかる教育が企画・実施され、人的にも機能的にも充実しつつある。

さいごに

以上、予科の始まりから現在の初年次教育までを足早に眺め、制度の構築と当時の学生の様子を拾い集めた。さまざまなできごとの背景には、学生と教員、教員間の思いが交錯していると思われ、また記念誌にはその片鱗が記されている。調整に当たった先輩教員の方々のご苦労はいかばかりかと察する。時代は変われど人の成せる業（わざ）であり、予科設置から100年の節目にあたる年に、この歴史をふり返りその中での人々の息遣いを感じ、思いを馳せることで、今後の教育システムへ向けての叡智となればと思いつつ稿を終えたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、八木聖弥先生には本学歴史の節目ふしめの詳細ないきさつを、文献をご提示いただきながらご教授いただいた。また、名誉教授の花井一光先生には、校閲をいただいた。両先生にこの場を借りて、厚くお礼を申し上げる。

大学昇格と学位授与権

奥田　司／樽野陽幸

1921年の「専門学校」から「大学」への昇格によって本学にもたらされた最大の変革のひとつは、間違いなく、学位授与権が与えられたことであった。それまでの明治期の学位令に基づくと[1]、博士の学位は，帝国大学に論文を提出するか帝国大学総長推薦をもらったうえで文部大臣から直接授与される制度になっており、本学で独自に申請や審査を行うことはできなかった。また、論文は文部省本省で一括保管されるのであった。当時，本学の教員や卒業生はこのような手続きを経て学位を得ていたことが本学の記念誌の記述のなかに散見することができる。さて、本学の大学昇格前年の1920（大正9）年7月6日に旧学位令は改正された[1]。この改正によって、大学の研究科において2年以上研究に従事し、論文を提出し、学部教員会の審査に合格した者、あるいは論文を提出し、学部教員会において前記の者と同等以上の学力ありと認められた者のいずれかにおいて、文部科学大臣の認可を経て各大学が学位を授与することができる仕組みが整ったのである。この前後の本学の様子が京都府立医科大学百年史（1974年）の鯖田豊之教授の文章によって描かれているので以下に引用する。

「大学にとって重要な権限のひとつである学位授与権は、（略）1923年（大正12年）5月、すでにみとめられていた。しかし、府立医科大学がみとめた学位の論文内容が、よそより粗末であってはならない。教授会の論文審査は厳重をきわめ、すぐには学位受領者はでなかった。京都府立医科大学最初の学位受領者は、1925年（大正14年）4月11日付の宇野鬼一郎（大正6年卒、第2外科講師）、古玉太郎（大正7年卒、台湾総督府研究所員）だった。主論文は前者が『外科的疾患竝其手術後ニ於ケルAcidosisニ就イテ』、後者が『変性Agglutinoidphenomenonニ関スル研究補遺』だった」[2]。

大学昇格に当たっては、当時の小川瑳五郎学長が「研究の質保証」における本学のコミットメントに強い意欲と決意を持っていたと伝わるが、たしかにそのころの教授会の雰囲気と熱気の伝わる文章と思われる。当然であるが、これ以降の学位論文はすべて本学図書館で保管され、公開されている。次頁の写真は宇野鬼一郎の学位主論文を図書館の書庫で手に取る樽野教授である。古い書架にズラリと学位論文が並ぶ。

1960（昭和35）年度までは旧制度による学位取得が行われた。じつは文部省は1953（昭和28）年に学位令にかわって学校教育法による学位規定を制定したが、その後のしばらくの移行期には旧制度での学位取得が引き続き行われていたようである[2]。

図　本学図書館の地下書庫で本学の第1号学位論文（宇野鬼一郎論文、1925年）を検分する樽野陽幸細胞生理学教授。この書庫には1925年から2016年度にかけて本学での学位授与の対象となった5,845部の博士論文が所蔵されている。

本学は1957（昭和32）年に大学院を附設し、1961年（昭和36年）以降は新制度による学位授与システムに移行した。この制度では原則としては現在とほぼ同じく、大学院に4年以上在学して所定の単位を修得しかつ博士論文の審査及び試験に合格した者（甲）、又は博士論文の審査及び試験に合格しかつ前記の者と同等以上の学力ありと確認された者（乙）に博士の学位を授与する仕組みとなっている。

さて、この1923年という年は本学が学位授与権を与えられた年にあたるが，同時に関東大震災（同年9月1日）が起こった年でもあった。我が国の学位論文はそれまですべてが文部省本省で一括保管されていたのであるが、残念なことにこの震災によってそのすべてが消失したと伝えられる。改訂された学位令の施行にあたって、その後の学位論文の保存は、文部省に一部を保管するとともに、当該授与大学でもその写しを一部保管することとなった。2カ所に分散保存することで焼失のリスクを回避する形がとられたことになる。また、大学図書館では学位論文の一般公開の責を担うことが求められた。その後、文部省保管論文に関しては1935（昭和10）年からは帝国図書館に引き継がれ、さらに1948（昭和23）年からは国立国会図書館がその蔵書を引き継いでいる[3]。

こうした経緯を背景として本学では1925年の第1号論文を皮切りに、1960年までの旧制度で2000部の博士論文を、そして新制度に移行した後は1961年以降2016（平成28）年度までに甲論文1672部と乙論文2173部を産み出した。これら総計5,845部の博士論文は本学附属図書館にて保管され、公開されている。

このように、長年、紙媒体の学位論文を本学附属図書館で収めて来たのであるが、文部科学省は平成25（2013）年に学位規定を一部変更し、それ以降に学位授与さ

れた博士論文は、原則として印刷物ではなく、学位授与大学等が自学のリポジトリ―または公開リンクによって全文をネット上で公表するとともに、電子媒体によって国立国会図書館でも保管する仕組みに移行した。本学でも附属図書館が「リポジトリ橘井（きっせい）」を立ち上げて[4]、現在ではこの形式で学術論文の保管と公開を行っている。

博士論文の保存形態は変わったが、その後も学位研究活動は弛まず継続され、2021年7月時点での累計は甲学位1902件、乙学位2243件となり、旧制度での2000件と合わせて総計6145件の博士（医学）の授与が行われたことになる。くわえて2007年（平成19年）には医科学専攻修士課程と保健看護学研究科修士課程を設置し、2020年度までに、123件の修士（医科学）と105件の修士（保健看護学）を授与した。さらに、2018年（平成30年）には保健看護学研究科に博士後期課程を開設し、ついに2021年3月に第1号の博士（保健看護学）授与者を輩出するに至った。このように本学は多様な課題の解決に取り組む深い学びの場であり続けており、多数の研究成果を世界に向けて発信する研究機関としての役割を担い続けている。

附属図書館所蔵の学位論文の書棚に象徴されるように、大学昇格以来100年の間、本学はこのような形でたゆまず医学の発展に貢献してきたといえる。この書庫に立ち入るたび、身の引き締まる思いで大学昇格を迎えた当時の小川学長たちの思いを、大学構成員は、皆、共有するに違いない。

謝辞

学位論文保管状況を確認いただいた西山正俊附属図書館長と、学位授与者数を確認いただいた清水直喜教育支援課長と岩子真也大学院係長に深謝する。

1) 文部科学省ホームページ　「我が国の学位制度の主な変遷」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335452.htm
2) 京都府立医科大学百年史（1974年）
3) 国立国会図書館ホームページ「国内博士論文の収集」
https://www.ndl.go.jp/jp/collect/hakuron/index.html
4) 京都府立医科大学リポジトリ―橘井（きっせい）　https://kpu-m.repo.nii.ac.jp/

大学院に関して

統合生理学 / 研究部長　八木田　和弘

大学院関連の事項を時系列に記す。

1921年に旧制大学に昇格した本学は、1947年に発布された教育基本法・学校教育法による新制大学の設置基準制定から遅れること5年、1952年に新制大学として再スタートを切った。その後、1954年10月に東京大学に博士課程が設置され生物系研究科医学専門課程が設けられた（大学創立100周年記念誌より）。この流れを受け、本学にも大学院設置の機運が生まれたものの、経済的理由もあったのか当時の蜷川知事は、大学院設置は困難であると難色を示した。経済的理由に加え、教授陣容が大学院設置には不適当であるとの理由から、大学院設置はなかなか実現しなかった。途中、学長の辞任などの曲折を経て、1957年になって遂に大学院の設置に至った。初年度（昭和32年度）の大学院博士課程入学者は13名であった。その後、1963年（昭和38年）には30名、1966年（昭和41年）には59名の博士課程入学者があったことが記録に残っている。ところが、次の年から大学紛争などの影響もあって大学院入学者は激減し、昭和最後の1988年になってようやく42名の入学者にまで回復した。

1991年（平成3年）、国は大学がそれぞれ自由で多様な発展を遂げうるように「大学設置基準の大綱化」を提示し、自らの責任において教育研究の不断の改善を図ることを促すため「自己点検・評価システム」の導入を求めた。本学ではこれを受け、1992年（平成4年）に「あり方委員会」、1994年（平成6年）に「自己点検・評価委員会」を設置しその2年後に報告書をまとめた。この中で大学院に関しては「大学院を充実し、研究環境を建物、研究費、自由度などあらゆる点において最大限に確保していくことが、最重点課題である。」と明記されている。さらに2000年（平成12年）には、「京都府立医科大学の更なる前進～21世期に向かって～」がまとめられ、大学院重点化の検討を行う中で地域医療への貢献を踏まえた公立大学としての特徴ある機構改革を期待したい、との外部評価委員会の評価結果だった。ここで、大学院重点化と地域医療の関連付けがなされ、京都府内における高度先進医療を担う人材養成という責務を重点化した大学院が果たすという現在に至る基本路線が定められた（平成14年大学院再編にかかる協議書）。

このように2003年（平成15年）に重点化された大学院の役割が規定されることとなった。一方で、本学大学院の目的は「学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を極めて、文化の進展に寄与する」と規定している。そのために「専攻分野について研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度な研究能力及びその基礎となる豊

かな学識を養うものとする」と大学院学則に定められており、人類の福祉と学問の進歩に貢献できる優れた能力を備えた人材を育成することを第一の目的とすることを前提としている。これを踏まえ、今後、本学の大学院も普遍的な意義を追求しつつも時代に即して変わっていく必要に迫られることもあるかと思われる。あるいは本学における大学院のあり方自体も大きく変質することを余儀なくされるかもしれない。どのような未来を選びとるかは、現在の我々に託されていると言う他はない。

修士課程の設置について。2007年（平成19年）には、大学院医学研究科医科学専攻修士課程が開設され同年4月には定員10名の修士課程学生が入学した。設立の趣旨としては、自然科学分野における異分野融合が進む中で、2005年（平成17年）には京都工繊大及び京都府立大との3大学連携協議が開始されるなど、医学部出身者以外の大学院学生に対する教育研究指導の重要性があった。大学や企業との連携研究の必要性は現在に至るまで国からも強く求められているところである。医学に軸足を置きつつ学際的展開を図る人材の育成を目指しての修士課程設置であった。その後、国の国際化推進の流れに応じ、EUとの国際連携による修士課程ダブルディグリープログラムが2015年（平成27年）に設置されオランダ・マーストリヒト大学から2名の留学生が10カ月間にわたって本学で研究指導を受けた。ダブルディグリーとは、本学及び提携する海外の大学の両方の学位を授与される制度であり、これまで20名に及ぶ留学生が本学及びマーストリヒト大学の修士号を取得するに至っている。

さらに、大学院医学研究科博士課程においても、2007年（平成19年）に大阪大学を主幹とする「がんプロフェッショナル養成コース（がんプロ）」に連携大学として参画し、高度がん専門医療人材の育成を目指した大学院コースが設置された。さらに2022年（令和4年）には法医学人材養成コースの設置が決まっている。修士課程においても、2022年（令和4年）からゲノム医療の推進に伴い必要性が高まっている遺伝相談にあたる遺伝カウンセラー養成を目的とする「遺伝カウンセリングコース」の設置が決定されており、高度医療人材を担う大学院の役割は今後ますます高まっていくと考えられる。

謝辞

資料収集等にご協力いただいた教育支援課課長補佐岩子真也様に深謝します。

引用文献

1)京都府立医科大学創立100周年記念誌（1974年）

2)京都府立医科大学大学院再編にかかる協議書（2002年）

医学部看護学科並びに保健看護学研究科の歩み：
看護のMake Next

医学部看護学科　滝下幸栄

「京都府立医科大学の看護基礎教育の歴史は、日本の看護教育制度のひな形そのものですね。」医療社会史がご専門のある先生の言葉である。ここでのひな形とは、教育が典型的・定型的という意味ではなく、明治以降の看護制度改正の節目ごとに、本学は迅速に教育体制を整え、「京都府で最初」に許認可を得てきたことから、看護制度史とその成果の具体的な姿を本学に見ることができるという意味である。古くは1903（明治36）年の京都府取締規則、1915（大正4）年の内務省令看護婦規則然り、戦後まもなくの厚生女学部、1949（昭和24）年の保助看法下の甲種看護婦学院然りである。

そして、1992（平成4）年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の公布を受けて、1993（平成5）年の医療技術短期大学部、2002（平成14）年には京都府で初めての看護系大学となる医学部看護学科が開学した。さらに、2007（平成19）年にはこれも京都府で初めての看護系大学院である保健看護研究科（修士課程）が開設された。

「看護師等の人材確保の促進に関する法律」は、1921（大正10）年に医学科が大学昇格したときの根拠となった新大学令（大正7年勅令第388号）と同様に、看護基礎教育の高等教育化の試金石となった法律である。ここでは、高度な専門知識と技能を有する看護師等の確保・養成並びに国及び地方公共団体の責務として、養成のための財政上・金融上の処置に努力することが規定されている。この法律により本学のみならず、わが国の看護基礎教育の大学化が大きく進展することになった。

以降、2011（平成23）年にはがん看護スペシャリストを育成する大学院がん看護専門看護師（CNS）コースが設置され、2018（平成30）年には大学院保健看護学研究科博士後期課程が開設され、名実ともに高度な実践力と研究力を備えた看護職者育成が可能となった。

さて、このように本学はいつの時代においても京都の看護と教育の先鞭を切る形で発展してきた。トップランナーであるが故にその教育は熟考の中で整えられてきた経緯がある。「私たちは過去を振り返り、その栄光に自己満足する余裕は与えられていない。……今後つねに時代のそして医療の先端を走り続けることが期待され、要求されている。……」医療技術短期大学部の構想が始まりつつあったときの看護専門学校長の言葉である。また、大学院の開設においては「保健看護」という他大学では見られなかった概念、看護学と公衆衛生学、応用健康科学を融合した新しい実

践領域からのアプローチを試みるなど先進性と独自性を備えた研究科として出発している。

医学科は大学昇格100周年というすばらしい節目をお迎えになった。創立の周年を数える意義は、単なる記念としての位置づけのみではなく、未来に向けた活動の契機を提供するものだと考える。すなわち二つのメッセージ、創立から現在までを振り返り、「感謝」を広く伝えることがひとつ、そして現在から未来を志向し「Make Next（未来を創る）」を誓うことがひとつである。看護学科のMake Nextは、長い歴史を通じて受け継がれてきた「Heat、Hand、Head」の理念に基づき、豊かな人間性と創造性、高度な専門知識と技術のバランスを備えた、保健・医療・福祉などの様々な分野に対応できる看護専門職の育成を行うこと、そして、保健看護学研究科は、京都府立医科大学の「世界トップレベルの医学を地域へ」の理念のもと、学際的な活躍ができる看護学の実践者および教育・研究者を育成し、京都の看護研究と教育の中枢機関としてしっかりと機能していくことである。英知を結集し、医学科の100年に続いていきたい。

予科校章と双陵健児

奥田　司

予科校章制定のいきさつ

1921年（大正10年）の大学昇格時に際して文部省から要求された条件の一つは3年制の「予科」を持つことであった。この条件はなにも本学だけに突き付けられたのではなく、大学昇格を申請した教育機関に共通して求められたものであった。予科の3年間では旧制高校/帝国大学予科と同等の「教養教育」が行われる。旧制高校/大学予科は多様な価値観を反映するいわゆるリベラルアーツ（Liberal Arts）を提供する場として機能することが期待され、当時、自由な魂を涵養する教育を行うことが「大学」たる第一の目的とされた（図1　1919（大正8）年4月 大学令施行当時の学校系統図）。

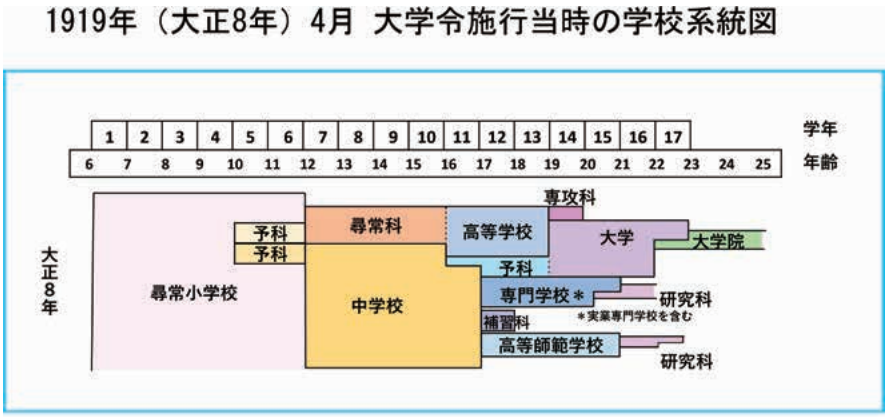


図1　大正8年大学令施行当時の学校系統図

その頃、旧制高校や大学予科ではそれぞれ校章を定め、学生の集まり等には自校を象徴する校章を記した縦長の「幟（のぼり）」のもとに参集する習わしがあった。例えば第一高等学校（後の東京大学）では白地に黒の二本線（旧制高校のシンボル）の地に柏葉とオリーブをモチーフにした校章が記されていた。他方、第三高等学校（後の京都大学）では深紅の地に白の三本線（他の旧制高等学校が二本線を用いたのと異なって「三高」ゆえに三本線を用いたとされる）を引き、その上に漢数字の「三」を桜花が囲むデザインの校章を配した幟であった。こうした背景の中、本学予科では学生

公募によって校章を定めたと伝わっている。この本学予科の校章決定のいきさつについては『京都府立醫科大學八十年史（1955［昭和30］年8月1日発行）』の322頁からの当時の英語担当の宮田一教授の記事に詳しい。以下に一部を新字体にして引用しつつ記載する。興味を持った学友はぜひ原文の全文を確認していただきたい。

「大学当局の諒解のもとに校章の図案を生徒より募集することに決定」したところ、「殆ど全生徒が応募し、間もなく多数の作品が集った」という。「慎重真摯な議論の末、遂に当時予科一年に在学して居た兒玉邦夫（昭和三年本学卒業、解剖学教室に入り助教授になった）の、橘の実と花と葉とを配したものが当選した。これが当時の京都高等工芸学校図案科（委員会註：現 京都工芸繊維大学）の本野精吾教授の手によって技術的に多少の修正を加えられて、素朴の裡に而も優雅な気品の籠った、医大予科にふさわしい我校章が出来上がったのである」と記述されている。図2に現在学友会名簿の表紙にデザインされている予科校章を旧学章とともに示す。また図3には現在の大学ロゴと創立150周年記念ロゴを示す。

図 2　現在の学友会名簿表紙に印刷されている予科校章（左）および旧学章（右）

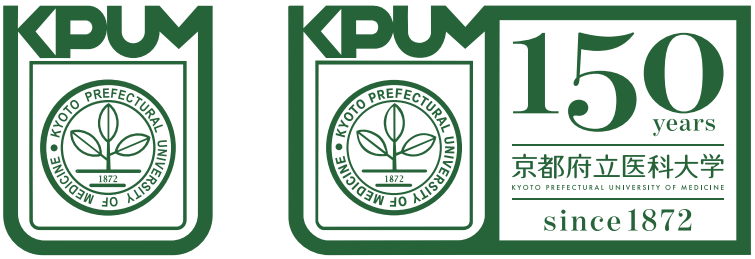


図 3　現在の大学ロゴ（左）と 2022 年の大学創立 150 周年記念ロゴ（右）

興味深いことに宮田教授は上段の文章に続けて次のような感想を述懐している。

「我々若き教授達をはがゆがらした創設当初の生徒諸君の遠慮勝な気風は、此校

章の制定により（略）次第に消え、東、『紅もゆる』と高唱する三高生徒に対し、西、双陵健児ここにありの意気高く、溌溂たる青年学徒の気風を始めて見ることが出来た」。このように、新校章の策定が当時の本学学生の意気を高揚させ、当時の「遠慮がち」と形容された校風を大きく積極的なものに変えたという認識があったようだ。ただし、愛校主義の暴走を心配してか、続けて以下のような文章も付記している。

「全生徒の総意により選定された校章の基調に『橘』が挙げられた事に就いては、当時第三高等学校の校章が『桜』であったのに対し、生徒間に多分に潜在していた対抗意識から、本学のすぐ近くの御所紫宸殿の庭の『左近の桜』に対し、『右近の橘』にあやかって意義をもたしたものだと、簡単に片づけてはいけない。かかる単に感傷的観点のみからきているのではない」とし、この新校章が感傷的観点からだけで制定されたのではなく、「橘」が中国の故事に由来する医学・医術の象徴であることを理解し、医学・医術を教授する本学の本務を表現するものであることも忘れずにいよ、と説くのであった。

橘井（きっせい）とは　そしてスクールカラー

宮田教授は八十年史のなかでさらに記述を続け、本学を象徴する際にしばしば用いられる「橘井」という言葉の解題を行っている。中国の古典である「錦字箋」を引用し、「晋の時、江准間の人、疫を患う。蘇耽 橘を植え、井を穿ち、疫むものをして橘葉を食い水を飲ましめ、輙ち癒ゆ」と記載している。転じて「橘井」の語句は名医の象徴としてとして用いられた。「橘井」は今でも本学、あるいは本学構成員を意味する上で用いられる。また学位の項でも記載したが、本学のrepositoryの名称である「京都府立医科大学リポジトリ橘井（きっせい）」もここに由来する。

また、スクールカラーの制定に関しても付記されているので引用する。曰く「校章が決定されると、誰から言いだしたともなく、スクールカラーを選定しようと云う声があがった。遂に生徒一同の世論となって、一同が自主的にいろいろ協議の結果、これも、柑橘類の果実が成熟する前の色、あの新緑色が選定され、其の頃から行われた愛知医大予科（委員会註 当時の愛知県立医科大学）との対抗競技（この対抗競技は、愛知医大が名古屋大学医学部となり予科が廃止になる迄年々続き、其後は対慈恵医

大戦になったが）には、応援団の幟や手旗等に用いられ、夏の麦わら帽子のリボンにも二本の白線入りの新緑色が用いられた」とある。伊良子清白の作詩になる学歌にもその第3節に「緑の旗」という記述が見られ、このスクールカラーが確立していたことが確認できる。

双陵健児たち

上述の八十年史中の宮田教授の文章の中に「双陵健児」という文言が出てくる。当時の予科学生たちは自身たちのことをこう呼んだ。明治末期から大正にかけ、旧制高等学校や大学予科は地名を丘陵になぞらえた呼び名を持っているのが通例であった。たとえば駒場に移転する前の旧制第一高等学校は「向ヶ丘」という地名から「向陵」と呼ばれ、旧制第三高等学校は吉田山を「神の山」と見立てて「神陵」と呼ぶようになった。地名ではなく地域の象徴と組み合わせたネーミングも多く、たとえば、旧制姫路高校が白鷺城下の丘陵ということで「白陵」と名乗った例などが知られる。本学予科では花薗の地に ほど近い「洛西双ヶ岡」を意識して、自学を「双陵」と名乗り、そこに通う学生たちは自らを「双陵健児」と名乗るようになった。ここでは、洛西双ヶ岡（丘）の地に草庵を結んで住んでいた吉田兼好へのシンパシーも強かったのではないかと推察される。実際、1951年に発行された「京都府立医科大学予科閉校記念」の冊子には、その冒頭に半透明の扉ページが挟み込まれており、そこに『ちぎり（契り）おく 花と双（ならび）の丘のへ（辺）に あはれいくよ（幾夜）の 春を過ぐさむ』という兼好法師の和歌の墨跡が鮮やかに印刷されている。ちな

図4　学友会館前に建つ「双陵健児像」

みにこの冊子の発行者は「京都府立医科大学予科双陵会」と名乗っている。この「双陵」という名称は、まちがいなく、当時の本学予科学生たちのアイデンティティーとなっていた。

本学が大学として活動を開始した最初の30年間、重要な役割を果たしつづけた本学予科を記念して、1976年（昭和51年）11月3日に、学友会館前に「双陵健児の像」が建立されている（図4）。

謝辞

文献3についてご教示いただいた八木聖弥医史学准教授、資料準備にご協力いただいた、松尾和俊学友会事務局長と近藤則子分子生化学研究員、そして原稿を査読いただいた加藤則人皮膚科教授の各氏に深謝します。

参考文献

1）文部科学省『学校系統図』
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318188.htm
2）『京都府立醫科大學八十年史』（1955年［昭和30年］8月1日発行）
3）『京都府立医科大学予科閉校記念』冊子（昭和26年3月、京都府立医科大学予科双陵会発行）
4）池田栄人、河野宏、白井正一「双陵健児像除幕式関連記事」青蓮会報　第22号（1977年［昭和52年］1月25日発行）、p16-21

学歌制定について

奥田　司

はじめに

1872（明治5）年に創立した本学では、「遅日の夢」と呼びならわされてきた「校歌」が古くから存在する。しかし、1921年の大学昇格の20年の後、新たに「学歌」も制定することが希求されてきた。この願いは同窓の詩人、伊良子清白からの寄稿を得たことによって1940（昭和15）年に結実する。「比叡は明けたり」と学友に呼ばれるこの新学歌は、伊良子清白による歌詞と当時の新進音楽家である服部正による作曲によって完成し、現在に至るまで何十年間にも亘って、入学式や卒業式といった重要なイベントで歌い継がれている。この学歌の制作の経緯については、多くの先輩方が本学同窓会誌「青蓮会報」に寄稿されてきた。また、多くの文学研究出版物でも紹介されている。本稿ではこうした文献の断片を拾い上げて、大学昇格の重要な象徴である学歌制定のエピソードを再確認したい。

漂泊の詩人　伊良子清白

伊良子清白（本学保存の名簿上の本名：暉造）は1877（明治10）年に鳥取県で鳥取藩医の家系で生を受けた。10歳時には父の三重県津市での開業に伴って転居し、三重県内でその後の教育を受けることになる。1895（明治28）年本学の前身である京都府立医学校に入学し、1899（明治32）年卒業時に「医術開業免許状」を得、その後「医学得業士」称号使用認可を受けた医師である。[1, 2]

幼少時から文芸に秀でていたとのことであるが、本学在学中に詩歌を中心とした文学活動を本格的に展開し、卒業直後には与謝野鉄幹・晶子らと交友するなど、その時代、端倪されざる文芸活動を行った。[1-3] 日本各地のみならず遠く台湾に在住して活動したこともあったと伝わる。[1-3]　就中最も有名なのは自作150編から珠玉の18篇を厳選した詩集「孔雀船」であろう。この詩集は1906（明治39）年に佐久良書房から刊行された[1-4]。当初は注目されなかったそうであるが、大正・昭和初期に高い文学性が「再認識」され、その後、梓書房や岩波書店などから何度も再刊された。こうして文学作品としてきわめて高い評価が定まり、後年、この詩集は「岩波文庫」に収載されることになる[4]。

清白はその前半生に各地を転々としつつ詩作を行ったことと、傑作の誉れ高い『孔雀船』の冒頭の詩[4]の表題『漂泊』にちなみ『漂泊の詩人』とも称される[5]。この『漂泊』の詩文は、近年、ある小説のなかで、登場人物の一人が好んで口ずさむ詩として描かれたことがあった[6]。ここでは、清白の詩が、どのような文化に親和性を持つ人間かを象徴する「道具立て」として用いられていると解釈でき、その詩文の芸術性とテイストが確たる形で現代の文学者たちにも共有されているものと筆者は解釈している。

人間愛の医師　伊良子暉造

清白（暉造）は、晩年、医業にもどって三重県鳥羽で開業し、地域医療へ貢献した。残念なことに戦後間もない1946（昭和21）年1月10日、疎開先の三重県度会郡の雪深い山道を請われて往診に赴く途上、遭難し急死した。事故ではなく、「脳溢血」と伝わる[1, 2]。寒村の村医であり傑出した詩人でもあり なにより同窓の先輩である清白が往診途上に殉死したエピソードは、文科省基準の統一した記載様式への修正が求められるまで、本学の「アドミッションポリシー」に「人間愛」の象徴として記載されていた[7]。

伊良子清白にちなんで、多くの詩碑や文学碑が建立されている[8]。たとえば鳥取市の菩提寺に建てられた伊良子清白文学碑の建立の発起人一覧には、郷土の方々はもとより、同県医師会長経験者であった同窓の松岡新平（昭和4年卒）の名を確認することができる[5,8]。また、終焉の地である三重県度会郡大宮町（現 大紀町）では同町教育委員会が1982（昭和57）年に顕彰の詩碑を建立し[8,9]「明治の詩人　伊良子清白」という記念の冊子を出版している[9]。この冊子では、稀代の詩人をほめたたえるばかりではなく、清白が倒れたとき担架を担いだ地元の若者のひとりであった同町の当時の教育委員会教育長の方が、清白の山村への地域貢献に対し惜しみない感謝を述懐していることに、むしろ強く心を打たれる[9]。さらに、清白の診療所保存や鳥羽の詩碑建立に際しても本学の先輩方が貢献されたことは山口稠夫（1949［昭和24］卒）、藤田俊夫（1953［昭和28］卒）、他の多くの青蓮会報の記事によって後輩たちの知るところとなっている[10, 11、その他多数]。

歌詞公募の顛末

さて、時は1940（昭和15）年、皇紀2600年と大学昇格20年を記念して、新規に学歌を制定することになったと当時の京都府立医科大学新聞は1940（昭和15）年7月23日付で伝える[12]。この記事と青蓮会報第11号の山田重正（昭和4年卒）の記事[2]、そして80周年誌記事（1955年刊）[13]を拾い読みするに下記のような状況を読み取ることができる。新学歌の歌詞については広く学内から公募し、選定を試みたものの、「佳作」に相当するもの5編しか得られなかった[2,12,13]。そこで審査員を務めていた本学卒業の小児科医であり歌人でありかつ花園大学教授であった山田重正が同じく審査員を務めていた伊良子清白に本学新学歌の作詞を正式依頼したということである。同年7月19日のことであった。自身審査する側であったこともあって固辞を続ける清白は、しかし山田の熱意によって説き伏せられた。受諾した清白は早くも同月24日には初稿を書き上げている。しかしながら山田はなかなかOKを出さず、5度も推敲させたと伝わる。同年8月15日、遂に完成稿が届けられた[1,2,12,13]。山田は「高き芸術的水準を示した、比類なき学歌」であり「晩年における随一の作品」と称賛した[2]。たしかに今読み解いても、3つの時間軸の流れに載せて、京の地で育まれた本学の歴史と そこで学ぶものの使命感を謳いあげる詩は、見事な調和をもって学友たちに力強く響くものになっているように感じる。

遂に新学歌制定へ

曲の方も一筋縄ではいかなかった。当初、東京音楽学校（現 東京藝大）の高名な作曲家にお願いしていたとのことであるが[12]、山田の文によると、この作曲家から「作曲しやすいように作詞の変更を求められた」ため、清白が「気分を悪く」してこの依頼が反故になったいきさつがあるという[2]。そこで清白は山田の縁類でもあった慶應大学出身の若き作曲家、弱冠33歳の服部正に直接依頼を持ちこんだと山田は記す[2]。服部は喜んでこの依頼を受け、現在私たちが歌い継ぐ「比叡は明けたり」とよぶ新学歌の完成を見たのであった[2,13]。1940（昭和15）年11月16日に新学歌披露が行われたが、この時のものと思われる大学本館（現 本部棟）の階段に合唱団学生や山田重正と

ともにたたずむ清白の写真が残されている（図1）[3,14]。また、新学歌完成の報は、1938（昭和13）年11月に、竣工したばかりの新病棟（当時、東洋一と謳われた4階建ての病舎であり、筆者が研修医の頃には12号、13号、15号そして16号と呼ばれる病棟が入っていた）の写真と組み合わせた京都府立医科大学新聞の記事によって広報された（図2）[15]。『京都府立醫科大學八十年史』では当時の英語教授の宮田一によって「医師伊良子暉造、医の天職に殉じて滅びたけれども、詩人伊良子清白は永久に亡びず、其の母校のためにものせる学歌は、大学の存する限り永遠に唱和せらるるであろう」と結ばれている[13]。

メロディーについての後日譚

なお、楽譜については後日譚があり、メロディーに関して一箇所音符の異なっている二種の楽譜が伝わっているのではないかとする疑義が久富文雄（昭和41卒）によって提起された[16]。たしかに前出の京都府立医科大学新聞昭和15（1940）年11月23日付記事[15]や、本学に伝わる楽曲を寮歌同好会のため採譜した貴重楽譜集である「双陵歌集（1986［昭和61］年11月）」[17]には1音変化のある「タイプⅡ（久富による命名）」の楽譜が掲載されている。一方、本学/学友会から刊行された学歌CD（1994［平成6］年3月）[18]に収録されている合唱団たちばなと本学オーケストラ部が歌い演奏するメロディーや学友会名簿掲載の楽譜は「タイプⅠ（同）」であった。多くの学友はそのどちらも耳に馴染んでおり、またハーモニーを付ける際には両方の音を使っていることもあって、その正統性を論ずるのは難しいと思われていた。しかしその後、驚くべき発見があった。楽譜原本の管理をしている「服部正WEB資料館」[19]が本学学歌楽譜の往時の手書き草稿を保管していることが判明したのである。学友会から連絡し、同資料館の快諾を得て作曲家の自筆楽譜原本を検分させていただくことができ、その結果、「タイプⅠ」が当初の作意であったものと、約80年の時を経て、決着したのである[20]。この経緯は久富の寄稿文[20]や服部正WEB資料館の掲載記事[19]に生き生きと描写されている。

大学の宝物

上述の通り伊良子清白と服部正によって魂を吹き込まれたこの学歌は紛れもなく本学の宝物である。これからの100年間も変わらず愛唱され、いつまでも学友たちを励まし鼓舞し続けるに違いない。

謝辞

文献1, 5, 9, そして14については鳥取県立図書館のご厚意によって参照させていただいた。松尾和俊学友会事務局長、西山正俊本学附属図書館事務長、そして井上詩織本学総務課主事に資料収集のご協力をいただいた。文献17と18については分子生化学 桒原康通講師の個人所有物を参照させていただいた。ご協力いただいた皆様に感謝申しあげます。

参考文献

1) 山路峯男『伊良子清白研究』(木犀書房、1976年)。
2) 山田重正『～今日的存在としての伊良子清白先生～』(青蓮会報第11号、1973年9月20日)。
3) 伊良子正/平出隆『伊良子清白全集(全二巻)』(岩波書店、2003年)。
4) 伊良子清白『詩集 孔雀船』(佐久良書房1906年。後に岩波文庫 緑30-1, 1938年)。
5) 『漂泊の詩人　伊良子清白』(伊良子清白文学碑建立発起人会、1980年11月)。
6) 川上弘美『センセイの鞄』(平凡社、2001年6月、後に文春文庫・新潮文庫に収載)
7) 『京都府立医科大学医学部医学科アドミッションポリシー(平成21年度版)』(本学、2009年)。
8) 石黒宏太『伊良子清白の詩集 孔雀船と詩碑』(青蓮会報第95号、1996年2月10日)。
9) 『明治の詩人 伊良子清白』(三重県度会郡大宮町教育委員会、1982年11月)。
10) 藤田俊夫『清白 伊良子暉造先生の旧居の保存に学友会からの援助を希う』(青蓮会報第78号、1991年10月31日)。
11) 山口稠夫『伊良子清白詩碑除幕式』(青蓮会報第78号、1994年4月20日)。
12) 『京都府立医科大学新聞』1940年7月23日付。
13) 『京都府立醫科大學八十年史』(1955年8月1日発刊)。

14）松本和男『伊良子清白文学アルバム』(2007年7月25日、私家版)。
15）『京都府立医科大学新聞』1940年11月23日付。
16）久富文雄『これでいいのか、学歌のメロディー　～学歌のミステリー～』(青蓮会報第135号、2006年1月31日)
17）白井正一/石田嘉彦/鈴鹿隆之『双陵歌集』(太洋堂、1986年11月)。
18）合唱団たちばな/京都府立医科大学オーケストラ部『学歌CD』(京都府立医科大学/学友会、1994年3月)。
19）『服部正WEB資料館』(https://tadashihattori.com/)
20）久富文雄『学歌楽譜の原本見つかる』(青蓮会報 第187号、2020年9月30日)。

図1　学歌披露時に旧図書館棟（現 本部棟）前で撮影された記念写真（1940年11月16日）。前列中央が伊良子清白。向かって右が山田重正花園大学教授、左は森益藏化学教授兼薬局長、そして周囲は本学合唱団の学生たちと伝わっている（松本和男『伊良子清白文学アルバム』（2007年7月25日私家版）より）

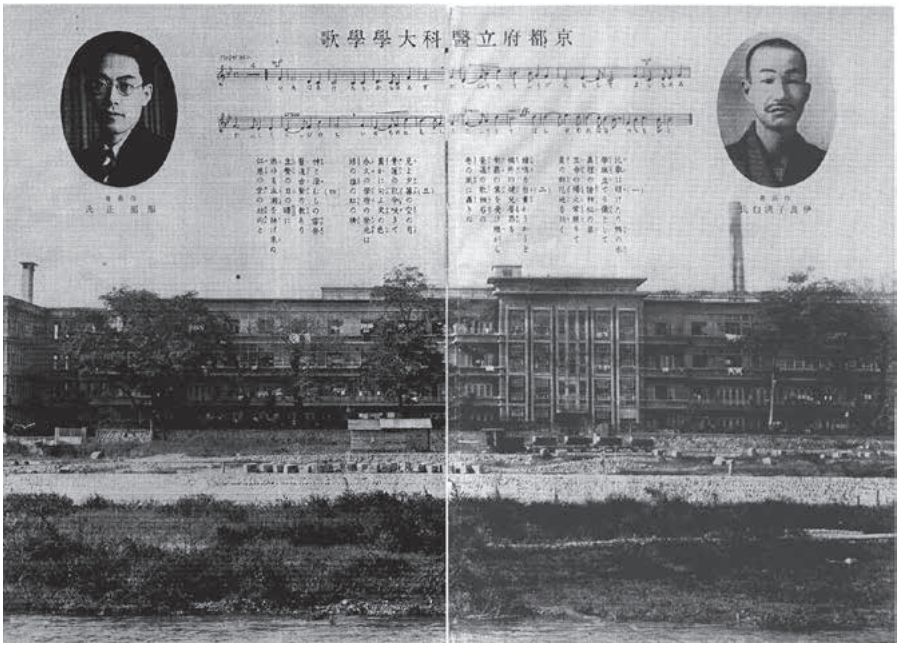


図2　本学新学歌制定を伝える京都府立医科大学新聞の記事。1940年11月。1938（昭和13）年11月に竣工したばかりの鴨川病棟（12号、13号、15号、16号病棟）を鴨川の対岸から西へ望む写真とともに、作詞者・作曲者の写真と楽譜を組み合わせている。この楽譜はタイプⅡ（本文参照）であることが見て取れる。

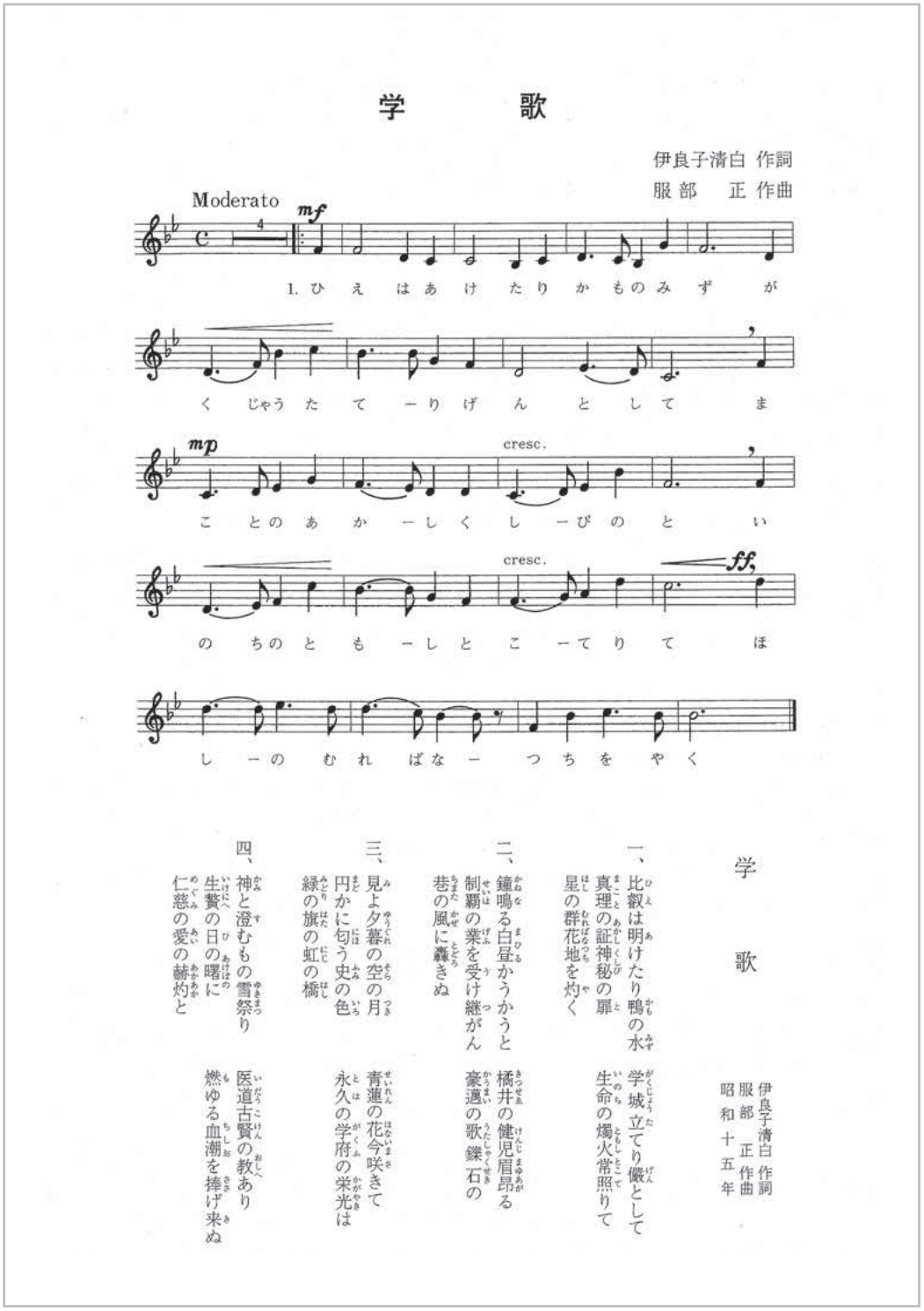


図3　現在歌われている本学学歌の歌詞と楽譜。学友会名簿冒頭に掲載されているもの。メロディーはタイプⅠ（本文参照）である。

女子専門部一期生と令和の医学生との往復書簡

学生たちからの手紙

本学の前身である京都療病院が創立された1872年（明治5年）ごろは、他地域でも公的な医育機関が創立されはじめ、我が国全体で西洋医学・医療導入に躍起になっていた時代であった。ただし当時の政府は女子を医学教育の中に参画させる意思はなかったとされている。『日本女医史 追補（日本女医会、1991年）』によると、当時の多くの既存の医学校、医学専門学校、そして大学医学部/医科大学などのなかで第二次世界大戦まで女子学生を公式に受け入れる国公立医育機関はほとんど無かったようである。しかしながら、この時期、逆風を衝くかのように女性医師のパイオニアとなる人材が幾人か現れた。たとえば明治期に女性としてはじめて医術開業試験に合格した荻野吟子（1885年女医公許）や、女性として最初の医育機関入学と医学実地研究生となった高橋瑞子（1884年済生学舎入学、1885年順天堂医院にて研究生）、そして後に東京女医学校を開設する吉岡彌生（1892年済生学舎を卒業し荻野吟子以来我が国27人目の女医となる）などがそうした人材のなかに含まれる。女性の医学への参入はその後徐々に拡大し、東京女医学校（1900年創立、後の東京女子医科大学）や帝国女子医学専門学校（1925年創立、後の東邦大学）そして大阪女子高等医学専門学校（1928年創立、後の関西医科大学）といった女性を対象とする医育機関が新規開設された。本学が大学昇格した1921年には日本女医会員数は既に724名に達しており、そのなかで京都府在住会員は15名にのぼると記載されている（『日本女医史追補』308頁、1991年）。

本学は1921年に大学昇格を果たしたが、しかし旧制医科単科大学時代には残念ながら女子への門戸は開かれず、公式に男女共学化するのは、戦後、新制大学となってからのことであった。ちなみに1952年（昭和27年）に行われた新制最初の入学者選抜では82名の入学者のうち12名が女性であった。しかし実は、これ以前に本学では別の形で女性への医学教育を開始していた。1944年に「女子専門部」を附設しその後3年間にわたって女子入学生を受け入れたのである。

1940年代当時、激しくなってきた戦中状況を考慮し、銃後の医療を担う人材作りの意図あって、いくつかの女子医専の設立がはじまっていた。本学でも1944年に女子医学専門部を附設し女子の医学教育を開始することとなった。『京都府立醫科大學百年史（1974年刊）』によると、女子専門部では学生は制服・制帽を着用し寄宿舎生活をおこない、医学の授業は大学か府第一高等女学校（現 鴨沂高校）で受け、臨床実習は当時の伏見分院（現在 京都府保健環境研究所が建つ土地に附属病院の分院が建っていた）で受けていたとのことである。そして初年度の1944年には募集80名のところ1160名の応募があり競争率のきわめて高い選抜であったことが記述されている。昭和19年４月から昭和26年3月まで三期の入学生に対して教育を行ったが、終戦後はGHQの方針もあって募集停止になった。紛れもなくこの女子専門部の方々が本学での女性医師教育を受けられた先駆けということになる。

さて、この女子専門部の話を聞いた医学科学生3名が、女子医専一期生の先輩（水越郁子先生）に手紙を出し、そのころのことについての質問を送っていたところ、長い年月を跳び越えて多感な青春時代を思い出してくださった。お返事は当時の女学生の医学教育についての貴重な証言であり、また現代に医学を学ぶ後輩の医学生たちへの愛情あふれる励ましであった。学生たちは大いに感銘を受けたようである。以下に全文を掲載し、学友で共有したい。

なお、水越先生へのとりなしは竹中洋学長のご紹介に拠るものでした。感謝申し上げます。

奥田　司

学生たちから女子専門部の先輩の先生への質問の手紙

京都府立医科大学医学科4年
小田　智水

拝啓

向春の候、日差しの明るさに春の気配を感じるようになりましたが、先生はいかがお過ごしでしょうか？

初めてお手紙を差し上げます失礼をお許しください。京都府立医科大学医学科4年の小田智水と申します。本学に戦争前後の3年間に限って、女子専門部が存在しましたことを奥田教授より聞き、機会に恵まれましてお手紙を差し上げる次第となりました。当時の京都での生活や本学での医学の学びについてお伺いできれば嬉しく思います。

私ごとではありますが、医師を志しましたのは、勉学が好きで、その智見を人の為に役立てる職に憧れを抱いたためです。先生方が女子専門部に入学されました当時は、女性ながら医師を志す方は、今に比して少なかったと存じますが、そんな中先生が医師を志したその思いはどのようなものだったのでしょうか？また、女子専門部は戦争で多くの軍医が国外に出たために、国内の医師養成増強を目的に作られたと伝わっていますが、当時の学びや生活の様子はどのようなものだったのですか？医学が目覚ましく進歩した先の数十年を医師として歩まれたそのご活躍は、私の目指す医師像と重なる部分があり深く尊敬しております。最後になりますが、長く医師を続けてこられた中で得た智見や大切に思うことなどがございましたら、是非お教えいただけませんか？

以上、急なお願いになり申し訳ございませんが、差し支えなければどうぞよろしくお願い申し上げます。

立春とは申しますが、お風邪などひかれませんようお気をつけください。末筆ながら、先生のご健康とご多幸をお祈り申しあげます。　敬具

令和3年2月16日

私ごとではありますが、医師を志しましたのは、勉学が好きで、
その智見を人の為に役立てる職に憧れを抱いたためです。
先生方が女子専門部に入学されました当時は、女性ながら
医師を志す方は、今に比して少なかったと存じますが、
そんな中先生が医師を志したその思いはどのようなもの
だったのでしょうか。また、女子専門部は戦争で多くの軍医が
国外に出たために、国内の医師養成増強を目的に作られた
と伝わっていますが、当時の学びや生活の様子はどのような
ものだったのですか。

学生たちから女子専門部の先輩の先生への質問の手紙

京都府立医科大学医学科3年

佐久間　理史

拝啓

暦の上では春の到来となりましたが、寒さの本番はまだこれからとなりそうです。

OGの先生におかれましては、いかがお過ごしでいらっしゃいますか。

さて、本日は突然のお便りを大変失礼致します。

私は京都府立医科大学医学科3年に在籍しております、佐久間理史と申します。現在はコロナ禍のためオンライン講義がメインとなっておりますが、将来の内科臨床医を目指し、日々専門課程の勉強に励んでいるところです。

過日、奥田司副学長より、本学の大学昇格100周年記念イベントの一環で、かつての女子専門部についてお話を伺う機会がありました。その際に、女子専門部という存在に強く興味を持ちましたのと同時に、戦時下に志高く医学の道へと進まれたOGの先生のお姿にも深く感銘を受けました。

もしもよろしければもう少し詳しく、かつての様子等をお聞かせ願えればと思い、唐突ながらお手紙を出させて頂きました次第です。

早速ですが、女子専門部は当時どのような学校で、また日々どのような医学生生活を送られていたのでしょうか。

女子専門部を志願された理由、京都の街中の様子や学内の雰囲気、休み時間や放課後の過ごし方、記憶に残る講義、教授方の思い出など、貴重なエピソードをどんなことでも、何かしらご紹介下さいましたら、大変有難く存じます。

そして最後に、現在の医学生に望むことについても一言頂けましたら、私達の大きな励みになるかと思います。

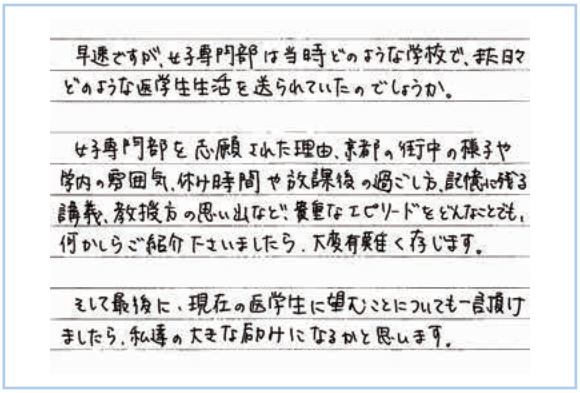
当時の資料を読む度に、この府立医大に女子専門部という社会的に存在価値の高い歴史があったことを大変誇りに思います。

末筆ではございますが、先生の益々のご健康とご活躍を心よりお祈りしております。

本日はお忙しいところ、長々とお読み下さいまして、誠にありがとうございました。

心より御礼申し上げます。　　敬具

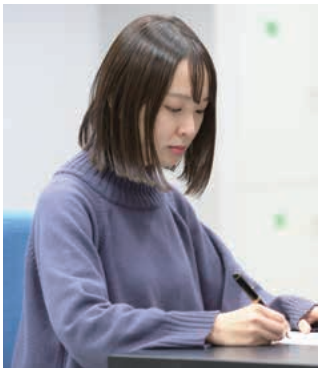
令和3年２月吉日



早速ですが、女子専門部は当時どのような学校で、また日々どのような医学生生活を送られていたのでしょうか。

女子専門部を志願された理由、京都の街中の様子や学内の雰囲気、休み時間や放課後の過ごし方、記憶に残る講義、教授方の思い出など、貴重なエピソードをどんなことでも、何かしらご紹介下さいましたら、大変有難く存じます。

そして最後に、現在の医学生に望むことについても一言頂けましたら、私達の大きな励みになるかと思います。



京都府立医科大学医学科3年

中江　彩

拝啓

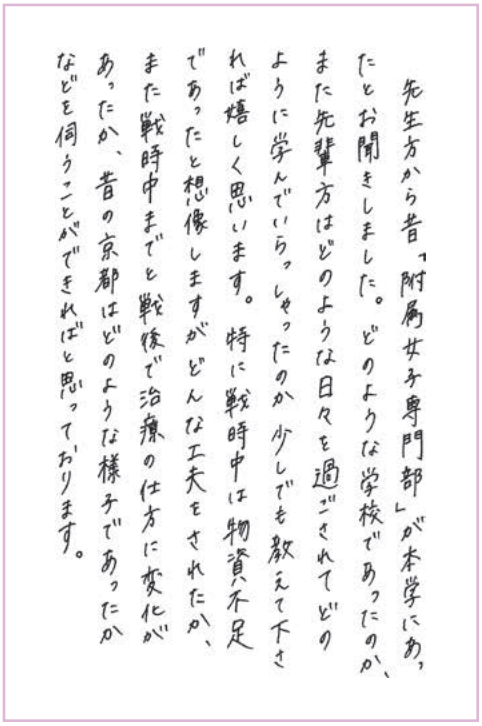
梅のつぼみも膨らみ始め、春の兆しを感じる頃となりました。

医学科三年生の中江 彩と申します。私は京都で生まれ育ち、知人が神経芽腫を患ったことをきっかけに病気で亡くなる子供達を助けたいと思い本学に入学しました。現在は内科や外科などの臨床科目の学習に励んでおります。また、医学の道に進むきっかけとなった神経芽腫の研究にも取り組んでいます。先輩方から技術を学び、誠意を持って患者さんと接する、心技体が揃った医師になるために勉強に励んでいきます。

先生方から昔、『附属女子専門部』が本学にあったとお聞きしました。どのような学校であったのか、また先輩方はどのような日々を過ごされてどのように学んでいらっしゃったのか、少しでも教えて下されば嬉しく思います。特に戦時中は物資不足であったと想像されますがどんな工夫をされたか、また戦前と戦後で治療の仕方に変化があったか、昔の京都はどのような様子であったかなどを伺うことができればと思っています。

時節柄くれぐれもご自愛くださいませ。　敬具

令和三年二月


先生方から昔「附属女子専門部」が本学にあったとお聞きしました。どのような学校であったのか、また先輩方はどのような日々を過ごされてどのように学んでいらっしゃったのか少しでも教えて下されば嬉しく思います。特に戦時中は物資不足であったと想像しますがどんな工夫をされたか、また戦時中までと戦後で治療の仕方に変化があったか、昔の京都はどのような様子であったかなどを伺うことができればと思っております。

女子医専一期生　水越郁子先生からのお返事

前略　ごめんくださいませ

ご書面ありがとうございました。

個々に御返事申し上げねばなりませんが

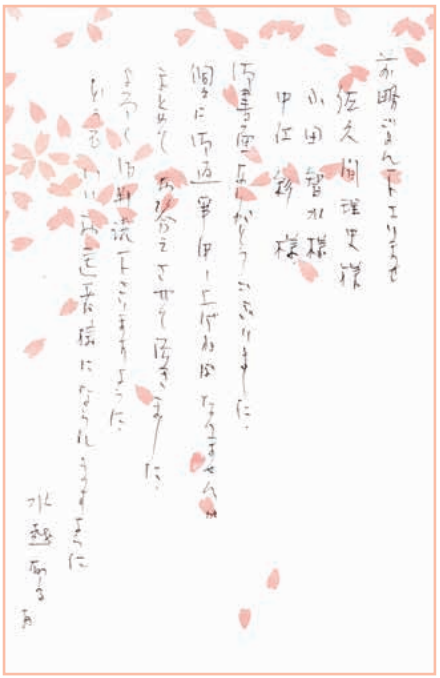
まとめてお答えさせていただきました。

よろしくご判読下さいますように。

どうぞ　いいお医者様になられますように。

京都府立医科大学附属女子医専の思い出

水越 郁子



府立医科大学創立150周年並びに大学昇格100周年、誠におめでとうございます。

女子専門部は戦時下の医師不足を急速に補うべく、各医科大学に男女の附属専門学校を併設された為とか聞き及びました。京都府立医科大学附属女子専門部も昭和19年春に設立されました。

私は第1期生81名。昭和19年4月に入学いたしました。

70数年も前の事で、忘れたことの方が多く、思い出せるのは僅かですが思い出して記してみます。同級生殆どの人に電話を掛けてみましたが、現在健在の方わずか数名しかおられませんでした。電話番号変更のため不明の方、健康でも会話は無理とご家族のお答えもありました。

あの明晰なお方がと言葉を失う事もございました。（余談で失礼いたしました）

それで先ず大学入学当時の様子より順に思いつくまま書き綴らせていただきます。

1）入学時の事

入学式の後教室に案内されました。一階で入り口に近い広い大きい部屋で段々になっていました。階段教室という所でびっくりしました。

ここが当分の間の教室に致しましたが、後には府一（府立第一女学校）今の鴨沂高校に、又時には北大路の府立盲学校に行って学ばせて頂きました。

伏見大手筋西の大倉酒造の前の伏見病院の病棟の奥の二階の元看護学校の教室へ替わったのは二年生の時でしたか。そこで卒業を迎えましたので、伏見分院が母校になりました。

2）先生の事

覚えております先生方のお名前を書き留めてみます。間違っていたら訂正ください。

入学時は府立医大の学長は中村登先生

女子医専の校長先生は志多先生

解剖は足立先生
細菌学は鈴木先生?＊
生理学は越智先生
臨床では内科　西田貫先生
外科　木口直二先生
眼科　弓削先生
小児科　三宅篤（?）先生＊＊
耳鼻科　浜　孝雄先生
皮膚科　片岡先生
産婦人科　志多先生

3）教科書の事

解剖学の本が岡嶋解剖学の大判の厚い本。それが半分の人数分しかなく、私も本が手に入りませんでした。かなり後になってから順番が廻ってきました。

4）先生の講義の事

主に口述でしたので一生懸命ノートに書き込みました。ノートに毎日沢山書くのでノートも自由に手に入りませんでした。書き残しの余白を集めたり、裏の白い用紙を集めて雑記帳にしました。

毎日ノートを書き写すので却ってよく覚えられました。

教科書以外に単行本など本屋になく、岩波文庫もなく、読むものは教科書以外に無く、通学時にドイツ語の辞書を読むしかありませんでした。

5）私達学生日常生活の事　社会の様子

・服装は、戦時中はモンペ。
　終戦後はスカートに上衣、房のついた角帽でした。
・住まいは自宅通学の方、市内に下宿する方、そして寮がありました。

新町三条、伊勢長さんという料理屋さんを寮としてお借りして20名程住まわせて頂いていました。盲学校の寄宿舎も使わせて頂いていました。

・通学は、国鉄、奈良電（近鉄）、京津（京阪電車）、そして大学までは、主に市電を利用しました。

6）国家試験の事

あれやこれやで工夫して５年間学びました。

国家試験は全員合格でした。１００％合格、次の学年もその次の学年も全員100％合格でした。

7）インターンの事

インターン制がありました。本学でインターンをされる方も地方へ帰ってされる方もありました。わたしも出身地の秋田赤十字病院で研修させて頂きました。ここでも院長先生からいい事を学ばせて頂きました。

一生の宝になることでした。

8）今のこと

今の時代は恵まれています。何もかにも満ち溢れています。

勉強しようと思えば本もテレビも携帯やネットで調べることもできます。

いつでも出来るが却って後廻しになってしまうかもしれませんが。

医師になって大学を離れて開業すると、日常の多忙さに追われてついつい。

大学でしっかり学んだから、まだまだ知識は沢山持っていると思ってしまいますが、医学も日進月歩進んで行きます。立ち止まっていると遅れてしまいます。

市中の患者さんの声で　“あの先生は今でも勉強熱心なので安心して診てもらえる･･･”という会話を耳にしました。

一生勉強です。いつまでも頑張って下さい。

＊編集委員会註：疑問符を付けていらっしゃるが、鈴木成美教授のこと。
＊＊編集委員会註：三宅廉女子専門部小児科教授。本学昭和3年卒。後年、神戸のパルモア病院の院長となり新生児医療に取り組む。

学生たちからの礼状

水越 郁子 先生

拝啓

春日の候、うららかな好季節を迎えました。

水越先生におかれましてはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、先日はお心のこもったお手紙を頂戴しまして、誠にありがとうございました。嬉しく拝読しました。

水越先生が女子専門部で学ばれた当時のご様子を伺い、積み重ねてこられた時間の尊さに触れて、深く感銘を受けました。そして何よりも嬉しく思いましたのは、「一生勉強です。いつまでも頑張って下さい。」のお言葉です。このお言葉を一生のお守りとして大切に、頑張って参ります。

若草萌る好季節、どうかご自愛専一にてお過ごしください。

このたびは本当にありがとうございました。

敬具

令和3年4月11日

京都府立医科大学医学科5年　小田 智水

拝啓

若葉の爽やかな季節となりました。

その後、水越先生におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

先日はご多用中のところを、素晴らしいお便りをお送り下さいまして、誠に有難うございました。

奥田副学長を通しまして、皆で有難く拝見しました。先生の当時のご記憶が大変ご鮮明で、また非常に明確なことに敬服致しました。質問しました内容に的確にお答え下さり、心から御礼申し上げます。

最後にありました私共への励ましのメッセージを肝に銘じ、これからも一層精進して参りたいと存じます。

この度の先生とのご縁に、感謝致します。

末筆ではございますが、水越先生とご家族の皆様の益々のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

敬具

令和3年4月吉日

京都府立医科大学医学科4年　佐久間 理史

拝啓

このたびはご丁寧なお手紙ありがとうございました。初めて知ることばかりで大変興味深いものでした。今後医師として教えて頂いたことを役立てていきたいと思います。

時節柄、御身大切になさってください。

敬具

令和三年四月六日

京都府立医科大学医学科4年　中江 彩

このたびはご丁寧なお手紙ありがとうございました。初めて知ることばかりで大変興味深いものでした。今後医師として教えて頂いたことを役立てていきたいと思います。

さて、先日は、お心のこもったお手紙を頂戴し、誠にありがとうございました。嬉しく拝読しました。水越先生が女子専門部で学ばれた当時のご様子を伺い、積み重ねてこられた時間の尊さに触れて、深く感銘を受けました。そして何よりも嬉しく思いましたのは、「一生勉強です。いつまでも頑張って下さい。」のお言葉です。このお言葉を一生のお守りとして大切に、頑張って参ります。

最後にありました私共への励ましのメッセージを肝に銘じ、これからも一層精進して参りたいと存じます。

記念座談会Ⅱ

未来へ向けて思うこと

奥田　司　（大学昇格100周年記念事業　準備・実行委員会委員長）

藤野 雄三　（大学院医学研究科1年生　脳神経内科学）
安藤 新人　（医学科5年生）
北本 佳誉　（医学科4年生）
寺谷 彰太　（医学科1年生）

京都府立医科大学は1921（大正10）年10月19日、京都府立医学専門学校から大学へと昇格し、来年で昇格100年目を迎えます。さらに2022年は創立150年の記念の年。大きな節目を前に、学生たちとともに本学の過去と未来を語り合います。

提灯行列も出た大学昇格

奥田　今日は集まってくれてありがとうございます。ところでみなさんは、本学が大学に昇格したときのいきさつや出来事をどれくらいご存じでしょうか。

藤野　さっきもその話をしていたのですが、恥ずかしながら私もそうですけれど、大学昇格時の話はよく知らないという学生がほとんどではないかと。創立時のこと、まず病院が設立されてヨーロッパから3人の名医を呼び、彼らが医学教育も行ったという話はよく聞くのですが。

奥田　ではかいつまんでお話ししましょう。

日本では帝国大学が創設されたあと、1918年に私立や公立の専門学校などを大学にしようという大学令ができ、順次、大学に昇格していきました。ところが本学は、隣に京都大学があるということもあり、なかなか昇格が認められず、学校、府民をあげて大学にしてほしいという運動がおこり、文部省（現・文部科学省）より、では、法医学教室と薬物学教室を作り、病理学教室と外科学教室をもうひとつずつ増やし、精神病棟を学外に建設して移転し、それから予科を作ってくださいと。これを全部クリアしたら考えましょう、という条件が出ました。

奥田　司
大学昇格100周年記念事業
準備・実行委員会委員長

寺谷　あ、すみません。予科って今でいう教養課程のようなものなのですか?

奥田　それに近いですね。教養課程と言うようになったのは戦後のことだけれども。少し横道にそれますが、それまでの学生というのは中学校5年のあ

とに専門学校に行くわけです。帝大の場合は少し違って中学を4年で飛び級し、京都なら京都三高に入り、その後京都帝大へというのが俗にいうエリート。その旧制高等学校に匹敵する教養教育の場が予科で、うちの予科なら卒業後にうちの本科に進み、医師になるというのが既定路線でした。

安藤　思い出しました、今の花園学舎が元予科で、あのライオン像は昇格記念に作られたとか。

奥田　そう。なぜライオンだったか、我々が百獣の王だと言いたかったのかどうかはこれから掘り起こすとして（笑）。あの土地はOBがお金を出し合って購入したんですよ。で、今の体育館のあるところが精神病棟。河原町側では精神医学教室が転出した後の構内に法医学教室や病理学教室などを作って、ようやく1921年10月19日に大学昇格が認可されました。大学の1期生を迎えたのは翌年の4月。これが大学創立の1872年から数えると50年目にあたるというので、同年11月1日に創立50周年と大学昇格の大式典を行い、夜には職員・学生による提灯行列も出たそうです。

北本　OBや府民の方々の大学昇格に寄せる熱い思いが伝わってきますね。在校生としても身が引き締まります。

奥田　何しろ敷地面積の小さな医科大学で、今でもスペースについては困る場面が多いようですけど。土地を何とかして手に入れた苦労や、大学に昇格して本当にみんなが喜んだということを忘れないためにもささやかなでも催しをしたいと思い、100周年の記念式典を来年の2021年10月23日に予定しています。都合がつけばみなさんもぜひ参加してくださいね。

安藤 新人
医学科5年生

身近に息づく歴史の証し

藤野　先生のお話しから、本校は先人の喜びとともに期待を背負ってきた大学であることを再認識しました。ふと考えると京都、関西の各地域には府立医大出身のドクターがとても多いんです。知り合いのドクターは三代で本学出身。府立医大は「世界トップレベルの医学を地域へ」が使命ですが、地域に還元するぞという根本の考え方の潮流が目に見えて息づいているのを感じます。

安藤　私は大阪出身ですが、子どもの頃お世話になった小児科の先生が本校出身でした。OB・OGの多さが歴史の証明ということも確かにありますよね。

寺谷　実は僕がこの大学を選んだ理由のひとつが、歴史のあることでした。キャンパスの建物にも重ねてきた時間の重みを感じます。

北本　ここみたいに昔ながらの階段教室もあって。絵になりますよね。

奥田　昔の医学部の臨床講義棟はこういう教室が

藤野 雄三
大学院1年生　脳神経内科学

多かったですね。

安藤　身近に歴史が感じられ、ほどよい大きさで学生同士、ひいては先人たちを含めて人と人とのつながりをすごく感じられる。この大学自体が京都という町に似ているのかも。

北本　なるほど。京都といえば、私はこの学校のロケーションが大好きなんです。鴨川が流れ、御苑が近くて。京都の自然を満喫できます。大学になる前の病院を、よくぞこの地に移してくれたと先人たちに感謝です（笑）。

医療の未来へと糸を紡ごう

奥田　これからはみなさんが京都の、日本の、世界の医学の担い手となり、本学の次の歴史を作っていくことになるわけですが、そのことについて今、どういう風に考えていますか?

寺谷　医学についてまだ何も学んでいませんので具体的なことを思い描くのは難しいですが、何か貢献できることはないかを常に考える姿勢を持ち続けたいと思っています。

奥田　一人一人が頑張ってくれたら、それがこの大学の歴史そのものになる。何ができるかを考え続けることはとても大事だと思いますよ。

北本　個人としては一段一段階段をのぼりレベルアップを目指し続けるということですが、こういう節目の時期に在籍をし、歴史について考える機会に恵まれている世代として、その意識をより強くできるように感じています。歴史ある大学の一員なんだということを忘れずにやっていければ、それが誇りや勇気となり、何かしらの貢献につながるのではないかと思います。

安藤　私は公衆衛生や感染症について関心があり、その分野で国際貢献をするという目標があります。もしかしたらそれは地域貢献という府立医大の軸とは少し違うのかもしれませんが、総体的に世界から日本を見、地域を見て、外から発信し還元できることがきっとあるはずだと確信しています。次の

寺谷 彰太
医学科1年生

北本 佳誉
医学科4年生

歴史を担う後輩たちにも道は違っても各々の経験を共有し合い、伝えることができればと思います。

藤野　神経難病の患者さんを診ている私にとって最大の目標は発症を少しでも遅らせ、患者さんのハッピーな時間を増やすこと。また患者さんを支える仕組みについては課題が多くありますが、それでもお一人お一人がご自分らしい生き方のできるように尽力すること。そのために研鑽を積んでいくわけですが、ここにもうひとつ、「府立医大の先生に診てもらってよかった」と言っていただける医師を目指したいとの決意を新たにしました。そして、さっき北本さんも言ったように歴史の一員であるということですね。歴史は紡がれます。私たちの知識や技術も糸のように紡がれ私たちのところに来ました。歴史のある大学にいるということは、こうした意識を持てるチャンスも多いということ。私たちも後輩へ確かなバトンをつないでいかなければならないと思います。

奥田　ありがとう。個々が己の道を進むことこそがこの大学の未来を創ります。「自分の目指す道があること、それを支え助けてくれる人への感謝の気持ちを忘れないこと、誰かに・何かに・どこかに貢献できないかという意識を持ち続けること」。この3つが次の伝統を創るのだと個人的にはそう思っています。昇格100周年を自分の、大学のそして社会の未来を考えるきっかけにしていただければこれほどうれしいことはありません。

この座談会は2020年10月に収録しました